

菅専助作『桂川連理柵』より

# お半と長右衛門とお絹

「桂川連理柵」の楽園喪失

小林 志郎 作  
(鬼島 志朗)



金子 亨「無言譜一再生への道一」200号  
第78回独立展出品作

この台本に、金子亨東京学芸大学教授（独立美術協会）の作品を掲載させていただきました。主人公お絹と岸野とお半の三人がひたむきに生きる世界の暖かさとケイオスとあまりに近似している作品です。ああ、こういう人物たちを書けばよかったのだと覚醒しました。

## 第一場 プロローグ

舞台は一面、石膏で塗り固められた感じである。石膏は粒子が粗く、表面がざらざらしている。

アクティング・エリアは大きく三つに分けられる。主エリアは客席の正面にあたるメイン・ステージであり、これは全エリアの五分の三を占めている。

もう一つは従来の花道に似たアクティング・エリアである。この部分は本舞台から七三ぐらいまでの長さであり、非現実的な事象や心理の陰の部分演ずるために使用される。従って俳優の登退場使用されるものではない。残りの五分の一は上手側にあり、仮花道にあたる部分である。ここは二度目の道行きに使われるためにもうけられたエリアであり、演出上なるべく他のシーンでは使いたくない。

さて開演の手順について語ろう。開演三十分前に太鼓の演奏がある。歌舞伎の「着到」に似ている。開演五分前になると「まわり」がはいる。「まわり」はコロスが舞台へ登場して演奏する。時間になるとコロスが「ドン、ドン、ドン」と大きく床を三度打って知らせる。

開演音楽が流れてくる。コロスが踊る。

下手の花道に長右衛門が立っている。彼は三十歳代である。

コロス 今昔となる太鼓  
今昔と鳴る太鼓  
神楽の五十鈴片そぎの  
片そぎの  
千木（ちぎ）はうち外に変れども  
誓いは同じ桂川  
無念の鼓は  
父母の声  
羯鼓太鼓は  
幼児の声  
千早ふる神楽の遊びおもしろし  
太鼓の拍子を揃えて  
とうとうとうと踏む足音に  
鳴る雷を踏みとどろこし

あめもはらはら晴れやかなり<sup>1</sup>

クロス 江戸時代の小市民は今日と変わらず  
大変勤勉であった  
帯屋長右衛門もその一人  
いってみれば、実力ある中小企業の社長後継者であった。

新しい歯切れの良い音楽が始まる。

クロス 闇に白玉踏みしめて  
固く結びし帯と帯  
小石や木の根に足を空  
右によろよろ、左によろよろ  
桂川の道行は  
川の瀬や川の淵

いま聞こえしは  
岸野女郎の包み泣き  
長右衛門、声明を  
もぐもぐもぐと唱えつつ  
南無観自在  
南無観自在  
南無観自在<sup>2</sup>  
ぺたぺたぺたと引かれゆく

ハッと飛び立つ水鳥に  
おびえて手繰る  
帯と帯  
長さん、岸野と  
音に怯えつ、音にひかれて川下へ

不義や不忠の衣でも  
晴れ着とまとう  
岸野女郎と長右衛門

---

<sup>1</sup> 石見神楽「切目」

<sup>2</sup> 東大寺修二会 お水取りの声明

ひたひたひたと寄せ来る波  
わらわらわらと渦巻く波  
瀬と淵に、寄せて巻いて、遠ざかる

身をしばくは時の鐘  
心を刺すは親の顔  
若い二人は死にに行く  
足を取られてよろよろよろ  
物におびえてへなへなへな

長右衛門 岸野、そう急くな、急くな！ 一寸たりと離れたら、おれは  
こわい、勇気がくじける。

クロス と泣く声の主を見返り  
岸野 長さま、いとしい、かわいわよ。  
クロス そっと引き寄せ身をもたせ  
岸野 きつう、抱いて。  
クロス きつう抱いて下されと  
男の首に取りすがる

ふと我に返りし優男  
今宵限りと見返れば  
後髪ひかるる街遠見

あれは近江屋、かなたは信濃屋。さすればあれはわが帯屋<sup>3</sup>  
年下男のたよりなさ  
指さす手元もいじいじいじ

長右衛門 あれは近江屋、かなたは越後屋。さすればあれはわが帯屋。  
岸野 あ、これ。そういうお前のたよりなさ、あどけなさに気を引  
かれ、売られた身とも年上とも知りつつかけた恋なれど、今わ  
の際にそのような、未練がましい素振りをば。

クロス アレ壬生寺の鐘の数  
九つここに北南  
東寺の空に曼荼羅の  
火影かすかに三筋町  
岸野はひるむ男の手をとって

---

<sup>3</sup> 『桂川連理柵』 浄瑠璃「道行思案余」の詞に倣って、論外の矛盾を入れ込んだ。地理的には帯屋も信濃屋も見えないだろう。

岸野 長さん、お前、まさか？  
長右衛門 ……  
岸野 長さん！

コロス と、二度呼びかけられて  
恋をたてなん、誓いをたてなんと  
抱きつくづくと見る顔と顔

女は男の身をはなし  
青き頬を両手につつみ  
幼子に説き聞かすがごとく

岸野 長さん、よく聞いておくれ。あたいが先きに身を投げる。  
あたいが果てたのを確かめたうえで、後に続いて下さいな。い  
えいえ、これはほんとの心、最後の願いと聞いて下され。岸野  
は強い女子なれば、些少なりとも女子の意地で、お前の心を男  
らしい水浅黄に染め上げたはず。

仮にお前が生き延びてもうらむような女子ではございませぬ。  
さあ、そここのところを聞き分けて、岸野の最後を見届けて下さ  
れ。いまだに岸野が迷うのは、愛するが故に、一緒に死んでほ  
しくもあり、愛するが故に生きながらえてほしくもあり……え  
え、胴欲なこの女。あれあれ河原の彼方で提灯が乱れ舞う。あ  
れはまさしくあたしたちを探し求める店の衆。見つからぬうち  
に。

コロス 長さん、さらばと  
帯を解いて  
手をふりきり  
桂川に身をおどらせる

水の音。水鳥が数羽、飛び立つ。鬼火があがる。  
光の洪水となる。長右衛門はもだえつつ後ずさりす  
る。波音が高まる。

長右衛門 岸野、岸野、岸野……

名を呼び、崩れ落ちる。

照明、容暗する。

にぎやかな祭り囃子が始まっている。照明が入る。舞台にはコロスたちが踊っている。長右衛門は倒れたまま動かない。若い二人の旅の女が長右衛門に気づいて近寄ってくる。

旅の女一　これ、旅のお方。  
旅の女二　もし、旦那さま。  
旅の女一　もうし、もうし！  
旅の女二　素敵な方ね。気を失うなんてカッコいいわ。  
旅の女一　そうね。  
旅の女二　旅の恥はかき捨て。袖触れ合うも他生の縁。いっそのこのまま  
……。  
旅の女一　それより早くお薬を。

二人して薬を飲ませ、介抱する。長右衛門、気がつく。

旅の女二　申し、旦那さま。やっとお気づきになりましたのね。もう心配で、心配で。（寄りそう）  
長右衛門　これは大変ありがとうございました。長い旅の疲れと、お昼に頂いたお寿司があたったのでしょうか。きつい差し込みにしばし気を失っておりました。  
旅の女一　あなたには女難の相がありますわ。お気をつけなさいませ。  
長右衛門　ええ？  
旅の女二　気にしない、気にしない。妬いているのよ、彼女。それよりももう日暮れも近い。この近くでお泊まりなさった方がよござんす。それにしても、いい男。  
長右衛門　なんとおっしゃいました？  
旅の女一　女難の相がありありと。  
長右衛門　（動揺を隠して）それは何より。（無理に大きく笑う）

二人の女は長右衛門が立ち上がるのを助ける。裾の泥を払ってやる。額の汗を拭いてやる。

音楽が変わって花道から、お半、下女お竹、丁稚長吉が出てくる。

下女 それはお嬢さま、何と言っても年下の男の方が……。

お半 そんなことがあるもんかい。やはり年上の男の方が。お金の問題じゃなくてよ。何かにつけて心強いし、それにあたしたち女性の気持ちを分かってくれるし。

下女 アラ、お嬢さん、男はとかく子ども扱いするものですよ。それにお嬢さんのように十四歳位では男の気持ちの裏が読めるものですか！

長吉 おぼはんはすぐに男の心は裏があるっていうけどさ、そんな男しか知らないんじゃないの。

下女 お黙り、長吉。ガキのくせして、よく言うじゃないか。色気づいた雄猫ってお前のことよ。八百屋のミー坊や、おそば屋のお春どんを追っかけ回して一人前の色事師のつもりなんだから。お嬢さん位の貴婦人にほれてごらんなさいよ！

長吉 ほれるだけなら、おら死ぬほどほれているよ。

お半 まあ、長吉ったら、止してよ。あたいの理想の男性は三十五歳以上よ。

長吉 十五歳じゃだめですか？

お半 もちろんよ。後二十年したら出直しておいで。

長吉 一つ年上の男って理想的なんだけどな。

下女 お嬢さま、あのお方は？ もしやお隣の長右衛門さまでは？

お半 どこに。どこによ、お竹。

下女 それ、あそこに。

長吉 あれはまさしく帯屋の若旦那。

お半 これ、お竹。早く、ご挨拶をして頂戴。お願い。

お半は下女の後ろを押して、二人して駆けていく。長右衛門と一緒に歩いている二人の旅の女を押退けて。

下女 もうし、帯屋の旦那様、長右衛門さま。

長右衛門 これは信濃屋のお嬢さまとお竹さん。

お半 (お竹の帯を引っばって、自分が前に出て) 長右衛門さま、異なところでお目にかかりました。(と言いながら、旅の女たちに競争心のこもった目線を送る)

長右衛門 お半さんはどうしてここへ？

お半 父上に無理を願ってお伊勢さまへ願を届けた戻り道。それよりおじさんはどこかお加減が悪いのですか？

長右衛門 いや、もう何ともない。この旅の人たちに助けられ、悪夢から覚めるように治りました。

お半 それは皆様方、大変お世話になりました。このお礼はなんと申し上げていいことやら……。厚く御礼申し上げます。

さあ、さあ、おじさま、あたしが来たからには何も心配いりません。少しも早う宿をさがし、身体をお休めなされませ。それでは皆様、失礼いたします。お竹、長吉、お荷物を。

お竹・長吉 はい。へーい。

旅の女一・二 ちょ、一寸。これじゃ鳶に……。

長吉 油揚じゃ！

長右衛門 旅の女子衆、大変ありがとうございました。

お半 それではおじさま、参りましょう。

お半とお竹は長右衛門の手を引いてどんと上  
手に退場する。旅の女たちは悔しがる。

旅の女二 おませ、小へげたれ！

旅の女一 女難の相がでてますよ、長さま。

柵がはいる。

照明が容暗する。



金子 亨「天と地の狭間で」200号  
第79回独立展出品作



第二場 虎石町帯屋の場

## 暖簾を守る人、暖簾を盗む人

場内に低い読経の声が響く。水音が読経の背後に流れる。突然、たくさんの水鳥がいっせいに飛び立つ。ハッとするほど強烈な羽音がしばし続き、突然、静寂になる。

コーラス

柳の馬場を押小路（おしこうじ）、軒を並べし呉服店  
現金商い掛け硯  
虎石町の西側に、あるじは帯屋長右衛門  
掛け値如才も内儀のお絹<sup>4</sup>

帯屋長右衛門。三十八歳。身長一メートル七十三センチ、体重六十五キロ。桂川の渡船場に捨てられていた赤子を隣家の信濃屋治兵衛さんが引き取って養育し、五歳のとき、信濃屋から帯屋繁齋のもとへもらわれ、呉服屋の養子となる。二十五歳の時、絹を妻にむかえる。趣味、特になし。賞罰、「ナシ」と言いたいのですが、歌舞伎ファンならご存知のように、十四年前に桂川で心中事件を起こしています。相手は川東（ぎおん）の芸子岸野です。

岸野は水死しましたが、長右衛門は恐くなって、彼女を見捨てて逃げ帰りました。刑法、社会的なモラル、道義的な問題等を一時追求されました。しかしお芝居では、そういう点についてはあまり問われることなく、長右衛門は見事に社会復帰を果たしました。

ところで帯屋長右衛門という名前を聞いたとき、どういうイメージが浮かびますか？ 彼のソーシャル・ステイタスをどの辺に定めますか？ 長右衛門は株式会社「帯屋」の若社長、宮内庁や防衛省の出入業者、青年商工会議所の幹部としての地盤・看板・カバンをもっています。

---

<sup>4</sup> 「虎石町帯屋の場」床の浄瑠璃より

コーラスの照明が消える。

クロスが登場し、小道具類を配置する。長右衛門の義母・おとせが登場する。

コーラス 登場したのは、長右衛門の義理の母、おとせさんである。彼女は帯屋繁斎の後妻として、先夫との間に生まれた息子・義兵衛を連れて嫁いできた。性格のはっきりした中年の女性であり、何としても帯屋を息子義兵衛に継がせたいと大奮戦する。

おとせ 憎っくき長右衛門め、朝出たきりまだ戻らぬ。今日という今日こそ……。

長右衛門が憎いと女房まで憎い。ちと、長右衛門の女房、お絹を痛めつけてうさ晴らそうわい。こりゃ、お絹、お絹、お絹と言うに！

奥からお絹の返事があって、大急ぎで出てくる。このシーンは歌舞伎の世話狂言風に演じる。歌舞伎演技の立居振舞いを学び、表現の特性を再現してみる。ただし俳優の感性が調和できないところは、今日的スタイルを採用するのがいい。テンポやリズムが現代的であるよう配慮してほしい。<sup>5</sup>

お絹 は一い、お母様。

おとせ ここへお座りなさい。

お絹 はい、お母様。何か御用でございますか？

おとせ 何か御用で。フン、用がないのに呼んだりいたしますか！

お絹 いらぬ口答え申し訳ございませんでした。

おとせ これ、嫁女、長右衛門殿はいづくへ参った？

お絹 ご存知のように遠州様の蔵屋敷へ参りました。

おとせ はるばる遠州まで参られましたか。遠州までなら二十日や一月はかかろうというもの。わたしは朝食の後、息子の姿を見かけぬものゆえ、どうしたことかと。そうですか、はるばる遠州まで出かけたか。

お絹 いいえ、お母様。遠州ではございりません。遠州様の蔵屋敷まででござります。

<sup>5</sup> ここから「歌舞伎・世話演技」様式で演じる。

おとせ 何でござります。長右衛門様は遠州へ行かれたのではなく、遠州様の京屋敷へ行かれたと。

お絹 はい。

おとせ つい、目と鼻の先の？

お絹 はい。

おとせ こりゃ、嫁女。家を出たのは朝飯の箸を下に置いてすぐ後じゃ。もう昼過ぎたに戻らぬはどういう料簡じゃ。そうじゃ、そうじゃ。また、川東(ぎおん)でお座敷に上がり込んでいるに違いない。

お絹 いえ、研屋さんから届きました長州様の脇差しをもって伺ったのでござります。

おとせ ほっほう！ 脇差し一振りの用件で半日つぶす人がいますか。あの色男、馴染みの女と昼日中盃を交わし、帯解いて……、コチョコチョココチョコ。

お絹 お母様、それは言い過ぎでございます。私が弁護しますと角が立ちますが。

おとせ してもしなくても角が立ちますよ。お絹、わが身もちつとは意見なさらんかい。忙しい最中に半日も店を開けられては隣近所さまへの聞こえが悪いではござらぬか。

お絹 はい、お母様。

おとせ わが子ばかりを誉めるつもりはさらさらござらぬが、わが子の義兵衛は長右衛門に比べて仕事が速いばかりでなく、かゆいところへ手の届く気の使い方。実業家は、いえ経営者はこうでなければなりません。やはり親がしっかりしていないと子どもは駄目になるものじゃ。

お絹 お母様、ご心労をおかけして申しわけございませぬ。長右衛門様が帰宅なさいましたらとくとお話しいたします。

おとせ それじゃ、それじゃ。お話しするを口実に、二人して寝床にもぐり込み、さらに屏風をめぐらせて、母者人の悪口を言いながら、足をからめてチョメチョメチョメ。

お絹 それはあまりと言うものです。お母様、残酷なお言葉です。

おとせ 残酷とは、こんなものではござらぬ！ わが子義兵衛の身になって見やれ。弟であるが故に何かにつけて二番目じゃ。長男様の余り物や二級品で我慢せざるを得ない。どんなに才能があっても長男様のご判断が優先される。

クロス 二番目ではダメなんです。二番目であることが、悔しうて悔しうてこの身がさける思いじゃわい。

おとせ さがれ、ええ、もう、さがれ。

クロス 消えてしまえと手近の物差しをお絹に向かって振り上げる。

クロス さあ、お絹さん、お下がりなさい。

お絹　でも、ああまで言われて。  
クロス　かえって心証を悪くするだけです。

お絹、しほしほと舞台奥へ台所へ消える。  
大根を切る音が聞こえる。

クロス　継子を憎み、実の子をもてはやしたる鼻眞口。  
クロス　ところでここで繁齋（しげなり）を登場させましょう。その前にコメントを一言。彼は長右衛門の育ての親であり、おとせを後妻に迎えたこの店のオーナーです。  
クロス　聞きかねて隠居繁齋、数珠まさぐって奥より出で。

繁齋が正面から舞台中央に進み出る。

繁齋　お婆、聞きづらい。死なれた隣の治兵衛殿が五つになるまで育てられた長右衛門を、無理に貰うてわが家の根継ぎ。病で早世した女房は、隣への義理があると、荒い言葉も使わなんだに、長右衛門が成人以後に後妻に直った身をもって、連れ子の義兵衛ばかりを大事にかけ、兄のこととなると目の色変えてガミガミ文句ばかり言う。ちと嗜みやれ。

おとせ　おう、おう、そんなことだろうと思っていた。年を寄るに従って正も邪も見分けられず。隣近所への義理立てばかり。かくいうとせは、後家であっても、夫を思い、子を思う母の気持ちに従ったまでのことじゃ。

繁齋　もう言うな！ 妻に先立たれた寂しさから、そなたを後妻に選んだが、繁齋一生の不徳。（台所のお絹に向かって）これ、嫁女。たとえお婆がなんと言おうが気にかけてたもるな。

おとせ　その似非（えせ）仏心が過ちのもと。計算尽くめの長右衛門が父親の甘さを知っての遊び三昧。いつか帯屋の身代も右や左と傾いて、気づいた時は後の祭り。それを承知でずいぶんと長右衛門を可愛がらしゃれ。ああ、住みにくい世の中になったものだ。女である故に聞いてももらえず、ただただ耐えるの一字が女のすべて、お絹、ご隠居を連れて昼寝などさしてたも。さあ、早う。わしゃ悲しうて生きる望みがなくなった！

と大声を上げて泣く。コロスは懐中からおしぼりを取り出し、おとせに渡す。見かねてお絹が台所から走り出る。

お絹 お父様、あたしが至らないためにご迷惑をおかけして申しわけございません。  
繁齋 至らないのはこの繁齋。わしを怨んでも、けっして母者人をうらんんでくれるな。  
お絹 まあ、それ程までのお心遣い！  
繁齋 さあ、隠居部屋へ連れて行って下され。  
お絹 はい、お父様。

二人が出て行くのを横目で見送る。二人が消えるとおとせは泣き声を急に止める。<sup>6</sup>

おとせ 今に見ておれ、繁齋、長右衛門。きっと鼻を明かして見せようぞ。おお、悔しい、くやしいわえ！  
コロス と、手にした物差しひきしぼれば（物差しが二つに折れる）小道具を渡して下さい。芝居はそこまで。そのまま動かないで下さい。  
コロス と、向こうより小走りに義兵衛出て来たりて内に入り。

義兵衛が花道より走って出てくる。誇張された猛スピードで家へ駆け込む。

義兵衛 お母さま、お母さま！  
おとせ おお、義兵衛。そのように息せき切ってどういたした？ 何かよい証拠でもつかんだか？  
義兵衛 お母さま、まあ、聞いて下さい。（コロスに飲物をくれというしぐさ）  
コロス はい、どうぞ。

コロスは懐中からコップをサッと出し手渡す。柄杓を使って水を注ぐ。

<sup>6</sup> ここまで「歌舞伎・世話演技」様式で演じる。

義兵衛 一昨日、お兄様が支払いを催促に行った駿河様からの為替がまだ入金になっていませんので、飛脚屋へよって調べてもらったところ、驚くではありませんか、お兄様はちゃんと受け取っているのですよ！

おとせ それに間違いござらぬか？

義兵衛 僕を信じて下さいよ、お母さま。

おとせ とすりゃ、その百両は長右衛門がくすねたに相違ない。

義兵衛 そうですとも。ところでお母さま、あなた様の方のご首尾は？

おとせ おお、あつたとも、あつたとも。これを見やれ。

義兵衛 やや、五十両！

おとせ これ、声が高い！

義兵衛 どうやってこの五十両を？

おとせ これはな、昨日届いた浜松からの五十両。錢箱の合鍵を作って、ホホ、ちよろり盗み出しておいたのさ。百両の金をくすねたからにゃ、この五十両も長右衛門奴に塗付けてやる。

義兵衛 やはりお母さまのテクニックは最高ね。誰かに見られた覚えはございませぬか？

おとせ 見ていたのは、あの人ただ一人！（とコロスを指さす）わたしの仕事に抜かりがあるものか。

義兵衛 あの人には口が堅いから安心ですよ。ところで五十両あれば、二人して物見遊山も思いのままですね。

おとせ これ、使うことのみ考えてはならぬ。母者人としていつなんどき不慮の死を遂げるかも知れぬ。お前が一人になったとき、頼りになるのはただ金子のみ。その日のために少しでも多くの蓄えをしておくのじゃ。

義兵衛 でもお母さまには、せめて一度位、楽しい旅行をしていただきたい。わたしはお母さまの喜ぶお顔を拝見したい。これこそ、義兵衛が心底望むの親孝行！

おとせ わりゃ、悪党に似合わぬ健気な心。この母者人を泣かすではないか。おお、おお、嬉しくて、嬉しくて！

義兵衛 お母さま。

おとせ 義兵衛や！

二人は手を取りあって泣く。

クロス おとせと義兵衛は親子ですから、悪を働くにしても二人のコラボレーションは最高です。悪人といっても、社会悪とか体制悪とかを背負って立つほどの大物ではありません。ご覧のように、良いところも多少はあります。子を思う気持ち、母を思う気持ちなどは、今日まれなほど素晴らしいではありませんか！

おとせ ところで義兵衛。為替百両の横領を申し立て、ついでにこの五十両も長右衛門の仕業となすりつけば、奴の手にお縄がかかるは必定。だが相手は抜け目のない長右衛門、それに小賢しいお絹女郎がついている故に、ゆめゆめ油断してはならぬぞ。

義兵衛 はい、お母さま。義兵衛はお兄さまが憎くてなりません。お兄さまさえこの家からいなくなったら、どんなに幸せか知れません。でも、僕一人でこの店を切り回せるか、正直言って自信がありません。

おとせ こりゃ、そんな弱気でどうなることか。この母様がついている限り帯屋はそちのもの。母様はそのために繁齋殿の後妻におさまったのじゃ。女の執念は、男衆が考えるほど甘いものではござりませぬ。よいか、いつかは必ず、帯屋の主となってこの母様を喜ばせてくりゃれ。

義兵衛 はい。お母さまのおっしゃることはよくわかります。しかしお兄さまは義兵衛より容貌が優れています。言葉の使い方には品と雅があります。人の気持ちを上手につかみます。それに読み、書き、算盤は町内一の実力者です。

おとせ それがどうしたというのじゃ。今の世の中で一番大切なものは……

義兵衛 根性だとおっしゃるのですか？

おとせ そうじゃ。確かに教養があり、立派な顔は世渡りに大切な要件ではあるが、商人はちと違う。商人にとっての要諦はやる気の有る無しじゃ。

お前の父様は若い頃はやる気満々だった。その情熱にほだされて母様は父様のところへ嫁いだが、父様は年を経るにつれて色があせ、気づいた時にはただの男。あげくの果てに、わしとお前を残して消えてしまった。それからの母様は、ただただ、お前に夢を託して生きてきたのじゃ。女の喜びも、見栄も外聞も打ち捨てて生きてきたのじゃ。

こりゃ、義兵衛。母様はそちをそのような軟弱な人間に育てた覚えはござらぬぞ！

義兵衛 お母さま、義兵衛が心得違いをしておりました。お詫び申し上げます。折り入って、お願いがございます。長右衛門は追い出しても、お絹さんは残しておきましょう。美人ですから、お



店の宣伝にもなります。現にお絹さん目当てに来る客が何人も  
いることですから。

おとせ お絹は長右衛門の妻なれば、追い出す時は二人一緒。あの用  
心深い女を残しておいたら必ず禍が起こります。

義兵衛 そうは申しても、しょせんは女です。この義兵衛が責任を持っ  
て監督いたします。お母さま、ねえ、よろしいでしょう？

おとせ これ、義兵衛。今までにあの女郎に何度煮え湯を飲まされた  
ことか。今度こそ、こっちが煮え湯を飲ませる番。義兵衛、心  
を鬼にせよ。

義兵衛 駄目なんですか。お母さま、義兵衛はもう一人前の男ですか  
ら、安心してお任せください。。

おとせ そちや、お絹にほれているな？

義兵衛 と、とんでもございません！

おとせ 人を騙すことができても、この母様の目だけは騙せぬぞ！

義兵衛 いえ、決して。

おとせ こりゃ、義兵衛。そちや男子ゆえ、女子にほれたとて何の不  
思議があろう。そちを責めているのではない。さあ、素直に本  
心を明かして見なされ。さあ。

義兵衛 決して。

おとせ さあ。

義兵衛 さあ。

おとせ さあ。

二人 さあ、さあ、さあ。

照明が容暗する。

賑やかな音楽になる。花道に照明が入ると、義兵  
衛が立っている。向こう（客席後方）からお絹が登場する。

このシーンは現代劇のスタイルで演じられる。<sup>7</sup>

義兵衛 これは、これは、お絹さん。お詣りのお帰りですか？

お絹 まあ、義兵衛さん。

義兵衛 僕はこれからお参りするところなのです。

お絹 そうですか。それでは。

義兵衛 （彼女の袖をつかまえて）まあ、待って下さいよ、お絹さん。  
そうお急ぎになることはないでしょう。水臭いではございませ

<sup>7</sup> 下の巻「六角堂の段」より

んか。お引き止めしたのは、ぜひ伺おうと思っていたことがあるからなんですよ。

お絹　　そうですか。

義兵衛　　そう恐ろしい顔をなさらないで下さい。僕は悲しくなってしまう。ところで今日のお絹さんはすごくおきれいですね。いえ、本当ですよ。僕は一度でいいからお絹さんと外でお食事をしたいと考えているのです。

お絹　　そのことならご希望に添いかねます。

義兵衛　　いえ、お絹さんのお気持ちを無視してお誘いするような野暮ではございません。お食事をご一緒させていただきたいような御婦人になかなかお目にかかれません。義兵衛は大変不幸な男です。

ところで、お絹さんは毎日のようにお詣りなさるでしょう。これは普通の人には真似できることではございません。ご尊敬申し上げております。伺おうと思ったのは、お絹さんのようにお美しい、心の優しい、そう、天女みたいなご婦人でもお詣りしなければならない悩みごとがあるのつでしょうか？　ねえ、お絹さん、よろしかったらその悩みとやらを僕に話してくれませんか。

僕でできることなら何でもしてさしあげます。一体何を願っているんですか？

お絹　　さあ、当ててご覧なさい。

義兵衛　　ご婦人の願いはだれも同じでしょうね。家内安全、赤ちゃん、それから夫婦円満、亭主が浮気をしないようにって。離婚の最大の原因は、旦那の浮気だそうですね。

と言って、さりげなく肩に手をかけようとする。  
お絹がするりと身をかわず。義兵衛は手のやり場に  
困る。

義兵衛　　（気持ちの立ち直りが早い。空笑いして）とこんな具合に、その願いも空振りに終わるかも知れませんよ。なにしろ、このごろは神様も世知辛いですからね。

お絹　　いいえ、きっと届きますわ。

義兵衛　　届くといいんですがね。お絹さん、いい加減気のいい神様でも、女房に飽きた男の心を元に戻すような厄介な仕事はしませんよ。

お絹　　ええ？

義兵衛 僕があなたに言い寄るのも、ただ浮いた気持ちからではございません。ねえ、お絹さん、この熱い胸の内を察してくれませんか。（と言って、お絹の手を取り引き寄せようとする）

お絹 （きつく拒否して）浮いた心からか浮かない心からか知りませんが、夫あるあたしに言い寄ってもどうしてその願いが叶いましょう！ 義兵衛さん、お絹の身も心も長右衛門様のものですわ。

義兵衛 古いんだなあ、お絹さんは。さあ、そこでさ、お兄さまの心があなた以外の人のところにあつたらどうなさいますか？

お絹 つまらないこと、おっしゃらないでください！

義兵衛 お絹さんのような美しい奥さんをもちながら、お兄さんは朝から川東へよくいらっしゃいますよね。お絹さんのことを思えば、プロフェッショナルな女性たちと遊んでいるだけでも不道徳だと憤慨していたのです。

ところが、こともあろうに、お隣のお半さまに……。

お絹 ええ、お半さんと！

義兵衛 そう。十四歳のお半さんにひびを入れたというではありませんか。お兄さまは色魔です。色情狂です。

お絹 帰ってください、帰ってください。義兵衛さん、今まで、義兵衛さんの横恋慕に我慢してきましたが、あたしが「うん」と言わないと分かると、今度は夫の悪口、それも隣の年端もいかぬお半さんを誘惑したとの悪意にみちた作り話。一体、何を証拠にそんなことをおっしゃるのですか？ さあ、帰ってください！

義兵衛 そうですか。それほどまでにお兄さまを弁護なさり、この義兵衛を悪者呼ばわりなさるなら仕方ございません。この手紙をご覧ください。「長様まいる、お半より」。こういうラブレターをご覧ください。まだ義兵衛が嘘をついているとおっしゃいますか？

お絹 ええ？ あの、それをどこで？ 一寸見せてください。

義兵衛 いいえ、駄目です。お絹さん、あなたのお考え一つでこの手紙をお渡ししても、ここで焼き捨てても結構です。しかし、得にならない取引はお断りです。義兵衛は、真剣でございます。たとえ教養が低い、女々しいと誹られても、あなたを手に入れるためなら、どんなことでもやりますよ。

舞台の照明がかつと明るくなる。二人の動きが一瞬止まる。後見が出てきて、お絹にマスクをかぶせる。

義兵衛 お絹さん、義兵衛がそれほど憎いのですか？ 僕は死ぬほど愛しているのです。

コロスのお絹信じられません。

義兵衛 本当です。

コロスのお絹信じられません。

義兵衛 本当です。

コロスのお絹 義兵衛さん、あなたの情熱に負けました。

義兵衛 そんなら、あなたは？

コロスのお絹 あなたの愛を喜んで……

義兵衛 お絹さん！

義兵衛はお絹のマスクに接吻する。マスクがお絹の顔から離れる。義兵衛はマスクを抱きして接吻を続ける。お絹は接吻しながら手紙を読む。

お絹 手紙をお絹に譲ってください。

義兵衛 後で、母親と相談した上で。

お絹 それはないでしょう。

義兵衛 ああ、人が見えます。失礼します。

義兵衛はあわてふためいて、手紙を奪い返して逃げ出す。

義兵衛 お絹さん、また後で。手紙のことはご心配なく！

と言って退場する。お絹は自分のマスクを拾い上げ、じっと見つめる。

帯屋に照明が入る。おとせと儀兵衛が座っている。儀兵衛は潔く頭をさげる。

義兵衛 お母さま、嘘をついておりました。お許してください。僕は死ぬほどお絹さんにほれております。二人の仲もいい線まで行っているのです。

おとせ 手を取ったか？

義兵衛 なかなか。

おとせ 口付けしたか？

義兵衛 なかなか。

おとせ そうであったか。お前もなかなか男！ 女子にほれても無理ないが、選りに選ってお絹を好きになったとは……。

義兵衛 お許してください。義兵衛の気持ちに少しの嘘もございません。お願いでございます。義兵衛が、一生に一度のお願いでございます。お絹さんのこと、お許してください！

おとせ (冷静に) 義兵衛、お絹さえ手に入れば、後のことは母様の言う通りにしてくださるかな？

義兵衛 もちろんです。お絹さんと一緒にさえなれば。

おとせ しかとさようか？

義兵衛 しかと、間違いございません。義兵衛を信じてください！

おとせ わかりました。ところで長右衛門殿が間もなく帰ってくるはず。何としてもあいつがこの家に居られぬようにしてやるつもりじゃ。もし、長右衛門殿が家を追い出されるような大事件が出来(しゅったい)すれば、お前がほれているお絹も一緒にこの家を出て行こうとするに違いない。そこでだ、打とうが叩こうが、お前は力づくでお絹を引き止めることじゃ。言うことをきかなかつたら手籠めにするなり、売り飛ばすなりするがいい。母様は一切預かり存ぜぬこと。好きなように料理するがよい。くれぐれも相手が女だと侮ってはなりませんぞ。

義兵衛 お母様、売り飛ばすなんてとんでもございません。義兵衛は恋いこがれているお絹さんさえ手に入るなら、どんな悪でもいたします。

おとせ よく言ってくれました。それでは長右衛門殿が戻るまで、隣の部屋で詳しく話し合いしましょう。

義兵衛 はい。

おとせ そなたは、母様を悪い女だと思うであろうがな。

義兵衛 世が世ならば、人も人。なぜか身体が震えます。

おとせ 母様とて同じこと。おお、水鳥の飛び立つ音。

義兵衛 ええ？

おとせ いや、あれは水を汲む音。さあ、まいりま

二人は奥の部屋へ移動する。

本舞台の照明が消えて、下手花道が明るくなる。  
六角堂前である。お絹がマスクを見つめている。  
奥から長吉が出てくる。彼も考えごとをしながら歩  
いている。

お絹 (マスクを急いで隠し) あら、長吉どんじゃございませんか。  
長さん、お使いですか。浮かない顔をして。  
長吉 これはお絹さん。いい人と待ち合わせですか？  
お絹 まあ、長吉さんたら。大人をからかつてはいけません。  
長吉 だってお絹さんの顔が少し上気していますからね。  
お絹 恐れ入りました。いい人を待っていたの。何を隠そう、長さ  
んを待っていたのよ。  
長吉 ええ、子供をからかわないでください。

お絹が長吉の袖をつかんで、花道の突端まで連れ  
ていく。

お絹 長さん、教えて欲しいことがあるの。このお絹を助けるつも  
りで教えて欲しいの。  
長吉 何をですか。きっと知らないと思いますよ。  
お絹 いいえ、絶対知っていると思います。  
長吉 いいえ、知っていません。  
お絹 長さん、教えて欲しいのは、そちらのお半さんと夫・長右衛  
門さまのこと。長吉さん、お絹も心配でいたたまらいの。石部  
の宿で何が起こったのか、本当のことを知りたいの。  
もしもお半さんに悪い噂が立てば、信濃屋さんはお半さんを  
こっそり信州高遠のご親戚にお預けになさるでしょう。お半さ  
んが信州の親戚に送られるようなことになれば、長吉どんはお  
半さんの顔を見ることもできなくなります……。

コロスが子どもになって、わらべ唄風に歌う。

コロス へお伊勢参りの戻道  
石部泊りで明日は京<sup>8</sup>  
石部の宿であったとき  
かわいい長右衛門さんで  
お半女郎は

<sup>8</sup> 当然、「京立ち石部泊まり」とも言われる

岩田帯締めたとサ  
えっささの  
えっさの  
えっささのサ

長吉 (急に泣き出す) マアお絹さん、聞いてやってくださいまし。聞くも涙、語るも涙の物語。今を去ること三月前。お伊勢参りの戻り道。石部の宿でのハプニング。

長吉 アノナ、お半さまが、トイレへ行かれたので、おれがナ、灯りを持って行ってやったの。そしたら、お嬢さんが逃げ出すの。おれね、何もしないのに誤解されちゃったんだ。でもな、おれは親切だから、お嬢さんが風邪をひくといけないと思ってさがしてたら――。

コロスが切々と歌を合唱する。

長吉 ウェーン、ウェーン。旦那様とお嬢さまが。お嬢さまはうれし泣き。斯く申す長吉は口惜し泣き。おれ、その時、つくづく、愛とは不条理だって悟ったんだ。

お絹 えー、えー、そうでしょうとも。愛は不条理ですよ。道理、道理。惚れた男を寝取られて、いやさ、惚れた女を横取りされて、ニコニコしてる馬鹿はいないでしょうよ。

長吉 チョット、待ってください。お絹さん、言質を取られるとえらいことになる。丁稚がお店のお嬢さまに惚れるなんて、そんな身分不相応な妄想を抱いたりいたしません。

お絹 隠したって駄目よ！ ちゃんと、惚れてるってあなたの顔に書いてありますよ、長吉どん。

長吉 ええ、本当ですか？ イヤ、嘘だ！ おれが子どもだから騙そうとしてるしょう。お絹さん、おれはそれほど馬鹿じゃないんだよ。子どもって、純粹なんです。好きなものは好き、嫌いなものは嫌いとはつきりしているんですよ。子どもの世界には、お大尽も貧乏人もないんです、お嬢様も丁稚もないんです。ああ、おれは駄目だ。お半さんと丁稚の間の壁は越えられねえ。

お絹 その恋を叶えてやる、と約束したら。

長吉 (お絹が本気で言っていることに気づき愕然とする) 本当ですか？ お半さんと一緒にいられるなら、

お絹 あなたが約束さえしてくれれば……。

長吉 いやだいやだ、きっと怖い約束違くない。

お絹 いいえ、簡単なことよ。長さんも知っているように、お半さんと長右衛門さんが懇ろにしているという世間の噂。その噂を撒き散らしているのは、何を隠そう、おとせさんと義兵衛さんなの。その噂を消すに消されぬ理由があるの。恐ろしいことに、「長様参る、お半より」としたためられた一通の手紙が、どういわけだか義兵衛の手に渡り、二進も三進も動きがとれないのです。

長吉 「長様参る、お半より」！ ああ、胸が張り裂けそうじゃ。お嬢さんのラブレターか。

お絹 いいえ、ラブレターと決まったわけじゃないのよ。ただ義兵衛さんはその手紙を振り回して、不貞な輩の長右衛門様と別れて、義兵衛さんのいい人になれと激しく迫るの。さっきも六角堂様のお池のそばの藤棚に連れ込もうと……。

長吉 それはけしからんことです。男の風上にも置けません。

お絹 ありがとう長吉さん。あたしの頼みというは、あの、それはな……。

長吉 なんでおます。

お絹 その頼みというは、裁判になったとき、手紙に書かれた「長様とは隣の信濃屋さんの長吉さんよ」というてこなたを呼びにやるほどに、裁判所のコロスさんたちに聞かれたら、「いかにも左様でございます。」と仰ってくださいればよいのじゃわいのう。

長吉 ヘエ、そんなら、お半さんとねんごろにしているのは、この長吉じゃと言ひさえすればよいのでござりますか。

お絹 オイ、のう。

長吉 ヘイ、よろしゅうござります。よろしゅうござりますが、そういうことが、私んところのご主人様に知れたら、追い出されまするがな。

お絹 そうならぬようお絹がちゃんと断りを入れておきます。

長吉 お半さんとの恋路はこの長吉には叶わねども、愛するお半さんの美名と徳を守るためなら、手紙の表に認められた長さまとは、この長吉さまだと言うことに何のためらいが御座いましょう。

お絹 (長吉の純真さに、お絹が泣いている。) 長さん、申し訳ない。そんな見え透いた芝居をあなたにお願いして。

長吉 たとえ夫婦になれなくても、お嬢さんが幸せになれるよういつまでも寄り添っていてやりたいのです。

お絹 長吉さん！

長吉 お絹さん、泣くなんてみつともないですよ。



お絹 (長吉を抱いて泣く) 長吉さん、あなたに救われました。あなたの気持ちを大事にします。ありがとう。

照明が溶暗する。

本舞台に照明がはいる。コロスが居並ぶ。昔風、今風の格好したエリートの格好をしている。

コロス エリートはエリートである瞬間しか人に姿を見せてはいけません。それが宿命です。一流会社のエリートが居酒屋でしょんぼりしている姿はいただけません。男は演技する。エリートは死の際まで演技する俳優である。

花道に長右衛門が出てくる。出ては引っ込み、引っ込んで出てくる。やがて七三あたりで、無様に座り込んでしまう。

長右衛門 あー。

コロス あー。

長右衛門 あー、あー。

コロス あー、あー。

コロス 間違いを起こしたエリートの嘆き方の典型。意思決定能力を失ったエリートの苦しみ方のプロトタイプ。ホラ、長右衛門の吐く息が見えるでしょう。不完全燃焼の空気が花道に立ちこめている。彼の息です。嫌な臭いです。

たかだか人生五十年。流れるままに流してみるには勇気が必要だ。小心なエリートが何だって十四歳の女の子と枕を重ねたのだろう。

長右衛門 あれ以来、僕は人が変わってしまった。誰かに見られている。夢の中に、いつも音が聞こえ、絵が見える。路地を伝う駒下駄の音、それは岸野だ。襖障子をスルスルと閉ざす白い指、それはお半さんだ。

長右衛門は凍りついて動けない。暗闇に幻影を見る。下駄を履いた細い足、襖障子をトンと閉める幼い手。(ブルブルと身震いする) いや、こんなことにいちいち怯えていても詮無いことだ。

本舞台下手に、コロスが出る。辻占いの役を演じる。

辻占い      もし、若旦那さん。  
長右衛門    ええ？  
辻占い      お困りのようですね。占ってあげましょう。陰陽道かな、風水かな、それとも易経がよろしいかな？  
長右衛門    いや、結構だ。  
辻占い      そうおっしゃらずに。（強引に手を取る）あるお方が、あなたが訪ねるのをお待ちになっていますよ。すぐ、近くで。そしてそなたには、女難の相が……。

音楽が流れる。雨が降り出す。  
コロスが立ちあがり、傘をさす。衣裳を引き抜くと岸野になる。

岸野          お久しぶりです。  
長右衛門    おお、岸野！

長右衛門はフリーズして動けない。岸野が下駄の音を立てて消える。  
お半の声が聞こえる。照明が入る。お半が信濃屋の障子窓を開けて長右衛門を呼ぶ。

お半          おじ様、おじ様。何を驚いた顔をなさっているのですか。  
長右衛門    ああ、お半さん！  
お半          こんばんは。  
長右衛門    人目があるではないか。おじさんは今、掛取で追われている。こうしてはいられない。急いで帰らないと。  
お半          おじ様、お話ししたいことが……。  
長右衛門    わかっている、わかっている。申し訳ないが、今は取り込んでいます。後でゆっくりお話ししよう。

お半 おじさま！ 後でこの手紙を読んでもくださいね。お半だって大人です。あなたの気持ちと自分の気持ち、結んだ糸を十四の娘が泣く泣く切って……（障子をピシャと締める）

長右衛門 お半さん！ 後で連絡する。

おとせと義兵衛が帳場に座っている。おとせは錢箱の小錢を勘定している。儀兵衛は帯地（おびじ）を揃えている。<sup>9</sup>

長右衛門 ただいま。遅くなりました。母様、ただいま、戻りました  
おとせ 目と鼻の先にある蔵屋敷へ何うに、半日もかかるとはとういうわけか。赤子でさえ、一時間もあれば行ってこようもの。さあ、その訳を話してみ。

長右衛門 申しわけございません。

おとせ さあ、その訳を、とつとと話さんか。母者人と義兵衛の前では申し開きができまい。遠州様の蔵屋敷へ出かけたとは真っ赤な嘘。蔵屋敷へ何うを口実に、可愛い女と昼日中、逢瀬を楽しんできたのであろう。いや、そうに違いない。おお、その目、その唇。何と女好きのする。いやらしい、けがらわしい！

長右衛門 お母さん

おとせ お母さんなどと、呼んでくださるな！ 呼ばれただけで身が縮む。これ義兵衛や、長右衛門殿の仕事がのこっておったな。お前大変だろうが、片付けておくれ。

義兵衛 お母様、そのことならご心配なさらないでください。とつくに僕が……。

おとせ やってくれたか？

義兵衛 はい。

おとせ おお、何と感心なことじゃ！ 女狂いで仕事をずるける奴がいるかと思えば、愚痴一つこぼさず他人の仕事までやる者もいる。

長右衛門の父・繁齋が奥から出てくる。

繁齋 また鬼婆のしゃら声は、長右衛門が戻ったか。

長右衛門 あ、お父様。ただいま戻りました。

<sup>9</sup> 下の巻「帯屋の段」より一部を引用している

繁齋　それにしても遅かったではないか。何かと都合があろうが、用が済んだら早く帰るにしくはない。こりゃ、おとせ。さっきも言ってきかすに、長右衛門さえ見れば噛みつくようじゃが、近所の手前もちと思や。

おとせ　近所の手前があればこそ、あたしは兄者にご注意申し上げているのでございます。のう、そうであろう、義兵衛。

義兵衛　はい、母様。

おとせ　それ、おやじさま。義兵衛もうなずいておるじゃに。

繁齋　わかった。その話は一寸待ちや。長右衛門もひだるかろう。お絹、お絹。

お絹　はい。（奥から返事があつて出てくる）ああ、これは長右衛門さま、お帰りなさいませ。父様、何か御用でございませうか？

繁齋　長右衛門もひだるかろう。早うご飯を作つてやりや。

お絹　はい。

おとせ　いやいや、飯どころじゃない。今、この場ではつきりさせにやならぬことがある。

繁齋　何のことか知らぬが、後でもよろしいではないか。

おとせ　そうはいきませぬ。

繁齋　いや、後にしなさい。

おとせ　おやじが強情張るなら、このとせも後へは引かせぬ。

お絹　お父様、お絹は台所へ……。

おとせ　いやさ、お絹。お前もここで母様の言うことを聞きや。

お絹　でも。

おとせ　ここに居れというに。（改まって）こりゃ、長右衛門殿、一昨日取りに行った為替の百両、ドレ金見よう。ここへ出せ。

長右衛門　エッ。実はまだ受け取っておりません。一昨日、伺ったとき、ご主人が折悪しくお留守で。

義兵衛　お兄様、なぜ嘘をつかれるのでございます。僕が今朝、問い合せたところ、お兄様に渡しましたと、為替手形を出してみました。お受け取りになっているんでしょう？

長右衛門　さあ、それは……。

義兵衛　なぜお隠しになるのです。

長右衛門　さあ、それは。

おとせ　コレコレ、義兵衛。尋ねても無駄じゃ。百両の金は今頃川東（ぎおん）へ飛んだであろう。すると昨日上がった五十両も心もとない。これ義兵衛、錢箱を調べてみやれ。

義兵衛　はい。お兄様、失礼ですが調べさせていただきとう存じます。どうか鍵をお渡しください。

長右衛門は黙っている。義兵衛は長右衛門の懐に手をこじいれ、鍵束を引き出す。錢箱を開ける。

義兵衛 あれ、ここの金もない！  
長右衛門 そんな馬鹿な！  
おとせ 金がない、金がないと？ さもあろう。これ、長右衛門。女遊びは高くつくものでござりますな。締めて百五十両、見事にくすねなさいましたな。ほほ、天晴な家の跡継ぎじゃ。まことに、ホッホッホッホッホッホ、まことに見事なお手並み。こりゃ、義兵衛、笑え、笑え！  
おとせ ホッホッホッホッホ。  
義兵衛 ヘッヘッヘッヘッヘ。  
おとせ おお、そうじゃ。笑っておれないことが他にもあった。（ト懐中から手紙を取り出し）これ、この文じゃ。  
義兵衛 お母様、それは。あまりにお絹さんが可哀そう……。  
おとせ 何を弱気な。これ義兵衛、さっきも申した通り、母様に任せておきゃれ。目の前のものがお前のものになるかならぬか、ここが大事の瀬戸際。わかったな。さあ、おやじ殿に読んで差し上げよ。  
義兵衛 でも。  
おとせ 読めというに！  
義兵衛 わかりました。そうおっしゃるならお読みします。（お絹のそばへ寄って）お絹さん、ごめんなさい。先ほど約束しましたけど、お母様がああおっしゃるものですから。  
お絹 それでは約束が……！  
義兵衛 許してください。必ずこの責任を取ります。決してあなた様を不幸にはいたしません。  
お絹 あなたのお世話にはならないでも、自分でやっていきます。  
義兵衛 お絹さん！  
おとせ 義兵衛、お絹が、ああ言うなら面倒ない。さあ、読んでみやれ！  
義兵衛 はい。お絹さん、ごめんなさい。聞くも涙語るも涙の、こりゃ、皮肉な手紙だなあ。（泣き声になって）「長さままいる。お半より」。<sup>10</sup>

下手に立つお半に照明が入る。お半は手紙を認めている。

<sup>10</sup> 下の巻「帯屋の段」（引用はここまで）

義兵衛 「伊勢参りの下向の道、石部の宿の仮枕、今しも忘れ兼ね参らせ候」。「どうぞや、どうぞや、今度嬉しき御見(ごけん)を願ひ参らせ候」

本舞台の照明は容暗する。お半のみが照明をあびてくっきりと見える。

お半 「長さままいる。お半より」。「伊勢参りの下向の道、石部の宿の仮枕、今しも忘れ兼ね参らせ候」

コロスが出てきて、布団を敷く。照明が枕の近くにおかれた行灯の灯りになる。長右衛門が離れた場所から自分の仮面を見ている。

「お伊勢参り」の唄が聞こえてくる。

お半が部屋に入ってくる。続いて岸野が部屋に入ってくる。もう一人の長右衛門が長右衛門のすぐそばに立ち、二人の女性の行動をじっと見ている。お半が長右衛門のマスクをとって口づけをする。岸野に渡す。岸野がマスクに口づけをする。

音楽が続く。

もう一人の長右衛門 さあ、お半、離れてくれ！ 岸野、離れてくれ！

お半 好きだわ。

岸野 好きだわ。

お半 死にたくなつたわ。

岸野 死にたくなつたわ。

ドロドロに似た音楽が聞こえてくる。舞台の照明が容暗する。鬼火が浮かぶ。長右衛門は気を失って倒れる。照明が暗転する。新しい音楽になって、照明が溶明する。元の帯屋の帳場。<sup>11</sup>

---

<sup>11</sup> 「帯屋の段」(再度、引用する)

繁齋 昔から、色は心のほか、理性を失うと言うが、大の大人が十四の小娘をたぶらかすとは、そちはそれでも帯屋の跡継ぎかい。おりゃ、信濃屋さんをはじめ、世間様へどういう顔を向けらりよか。嫁女、お前の里へもどの顔下げて挨拶したらいいのやら。

わしの親父の代からも、帯屋といえば人様が、この世の鏡と言ひ習わされた立派な暖簾を誇る店。その暖簾にそちゃよくも泥を塗ってくれたな……。

おとせ お絹という女房を持ちながら、お前は何ということをしてくれた。わしとても恥ずかしくて世間様に顔出しができません。

義兵衛 お兄様の秘密を暴露したのも、お絹さんが可哀そうだからこそ。ああ、こんな不道徳なお兄様をもって、私は明日から外へ出られません。

お絹 一寸お待ちください。あの手紙をご覧になればびっくりも、お怒りにもなられましようが、長右衛門さまは決して淫らなことをなさってはおりません。ありゃ、相手が違います。

義兵衛 これさ、お絹さん。自分の夫の肩を持つあまり、長右衛門殿を弁護なさる気持ちはよくわかるが、もうそれは無駄というもの。いつまでも悪あがきするのは、聡明なあなたらしくもございません。

お絹 いえ、決して証拠もなしに弁護しているのではありません。

義兵衛 何をおっしゃいます。現にこの手紙には、「長様まいる」と書かれているではありませんか。こう書かれていてはどう言い抜けようたってそれは無理というもの。あきらめになって、この義兵衛と……。

お絹 これは気の早い義兵衛さん。独り合点なさらないで、ちょっとお聞きくださいな。確かに、「長様まいるお半より」と手紙の表には書かれていますが、さあ、その長様がきつい間違い。お半さまの色の相手は何を隠そう、あの長吉じゃ。

おとせ どの長吉？

お絹 あの長吉。

義兵衛 どの？

お絹 隣の丁稚、長吉殿じゃわいな！

繁齋 ええ、丁稚の長吉と？

長右衛門 お絹！

義兵衛 丁稚の長吉ですって！ ハッハッハッハッハ。

おとせ 丁稚の長吉だと！ ほっほっほっほっほ。

義兵衛 これはおかしい！ 長様とはあの長吉だつて。はっはっはっは。ま、待て。お絹様がそうおっしゃるなら、その丁稚を呼んできて。（下手、店の外へ出ながら）おーい、長様、長様、長吉様！

クロス二が長吉に役をトランスファーする。今まで着ていたクロスの衣装を脱いで、下手の店先に立つ。

長吉            へーい、ただいま、ただいま。ト、声高らかに、疾し（とし）や遅しと走り来る。義兵衛は落ち着く布袋なり。ヤヤヤヤツ！こりゃ、不気味な空気（怖じ気つく）。はい、さようなら。

義兵衛            長吉、待ちなさい！

長吉            へ、へーい。

義兵衛            ねえ、長吉。君は世話になっているお店のお嬢さまと愛し合っているというのは本当かい？ そんなことはないだろう。なあ、ないだろう。さあ、「ない」とありのままを言ってごらん。

お絹            長吉さん、何も怖がることはないのよ。ここへいらっしゃい。あたしの横へいらっしゃい。そう。分かっていますね。

長吉            （モノローグ）約束通り話してくださいねと、言うお絹の目まぜで飲み込む長吉。

                  あのねえ、皆様のしかめつつらしい顔に包囲されて浮いた話をしてくれていわれても話しにくいよ。

義兵衛            長吉、とつと言わんかい！

長吉            へーい、話しますよ。話せばいいんでしょう。アノ、伊勢参りの戻りにな、石部の宿で、ちつくりと面目ないが、お半さんと女夫事。ハイ、二人は堅く結ばれました！ はい、さよなら！

義兵衛が捕まえようとするのを、長吉はサツとかわし、逃げ出す。<sup>12</sup> 下手の安全な場所まで来ると立ち止まる。音楽になる。

長吉            ああ、人生は厳しいなあ。それにしても、我ながら見事に芝居をしたものだ。女を手に入れようとする男の一念、思い知ったるか！

                  でもおれも悪よなあ！ お嬢さんを欲しいばかりに、ついお絹さんに頼まれて、みんなの前で嘘ついた。でも、これが当世風というもの。そういう意味じゃ、お絹さんも当世風だよな。おれがこうやって歩いていると、「そこへ行くのは長吉どんじゃ

<sup>12</sup> 「帯屋の段」（部分的な引用はここまで）



ございませぬ。ネ、長さん、長さんったら」と呼び止めて、おれが「これはお絹さん、いい人と待ち合わせですか？」って言ったら、「アラ、いけすかない方」って、僕の腕をギュッと……。

お絹 (さっと出て) つねりはしませんでしたよね。

長吉 ウワワワワワ。こりゃ、驚いた。

お絹 長吉どん、お絹との約束よく守っていただきました。堂々として素晴らしかったわ。

長吉 へーい。それでは、ごめんなさい。

お絹 (手を合わせて) 長さん、ご恩を一生忘れないわ。

二人にあたっている照明が容暗する。

本舞台に照明が入る。前通りに繁齋、長右衛門、おとせ、義兵衛、お絹が座っている。長右衛門のそばにもう一人の長右衛門がいる。

お絹 お母様。お聞きのように長吉さんの証言があったからは、夫長右衛門さまの不義の疑いは晴れました。不倫はございませぬ。よろしいですね。ご納得ですね？ きちんにご返事ください。ご納得ですね？

おとせ ハテ、そりゃもうしょう事がないわ、今のところは。それはともあれ……。

お絹 「それはともあれ」と逃げないでください。ご納得のうえ、お話を進めてください。

おとせ そなたもきつい女子じゃのう。得心しましたよ、とりあえず。では、伺いますが、為替の百両と、この錢箱にあった五十両の金、合わせて百五十両は——。

義兵衛 一体どうなったんです！

おとせ さあ、長右衛門、錢の行方を説明しやれ。

おとせと義兵衛 さあ。

長右衛門 さあ。

おとせと義兵衛 さあ。

三人 さあ、さあ、さあ。

おとせ さあ、長右衛門、百両の金は？ 更に更に、五十両の金は？ 何、百両は川東に使い、五十両は預かり存ぜぬと。

長右衛門 お許してください。百両は訳あって使いました。しかし五十両は……。

おとせ　　そうか。そういう魂胆か。五十両はこちとら親子に科を着せようとする横着。よくも、よくも。こりゃ、義兵衛、チト痛い目に合わせてもかまわない。たたきのめして金の詮議を。

義兵衛　　はい、お母様。（傍白）金の詮議に名を借りて、今こそ晴らす恋の怨み。

義兵衛は手につばをくれ、長右衛門に打ってかかる。お絹がとめに入る。それをみておとせが義兵衛の助太刀に入る。

繁齋　　そちや、この繁齋の前で兄を打つ気か！ 弟の分際で兄に指一本触れてみよ、お前ら親子二人はこのままでおかぬぞ。いいか、よく聞け。長右衛門はこの家の主、百五十両が千両でも、自分の金を使うになんで一々文句をつける。五十や百の金を口実に、主の悪口つく時は、お前ら二人を追い出すぞ。

おとせ　　そりゃ、えらいえごひいき……

おとせと義兵衛　　というものでございます。

繁齋　　老いたりとはいえ、繁齋の目は曇ってはおらん。さがれ、さがれ！ 欲の皮のつっぱったたわけ者め！

おとせ　　言うことはもうそれぎりか。イヤサ、老いぼれ、ぬかすことはもうないか！ そっちがそっちなら、こっちもこっち。（義兵衛に）転んでもただは起きてはならぬぞ、よいか！

コロスが大笑してお店になだれ込んでくる。口々に「おめでとうございます」とお祝いの言葉を述べる。

コロス1　　義兵衛さんが後継ぎとのこと伺いました。

コロス2　　おめでとうございます。

コロス3　　それ、飲んで歌って、踊れ、踊れ！

皆々　　おめでとうございます。飲んで歌って、おどれおどれ！

コロスたちが踊りだす。おとせと義兵衛が踊りの輪に巻き込まれる。何回も「おめでとうございます」と祝杯が重ねられる。

やがてコロスはゴミの山を残して退去する。おとせと義兵衛はゴミの山の中に埋没して取り残される。二人は完全に消耗している。

おとせ 禿鷹め、禿鷹め！ よくも飲んだり、よくも食ったり。ああ、義兵衛、母者人は草臥れた。台所で、一杯しようかい。  
義兵衛 はい、お母様。

二人は台所へ去る。静寂。

コロス はや暮れかかれば  
下男が灯す八方向灯  
仏壇の御明しは年寄役と  
繁齋がこてこて灯す

繁齋 長右衛門、そちにチト話しておきたいことがあれど、今は疲れてそれもかなわぬ。明日改めて。

繁齋はそう言ってから暖簾の奥へ入る。  
柵がはいる。照明がきわめて明るくなり、空間は平面的に見える。ここから歌舞伎のくどきに似たシーンになる。

お絹 コレ、長衛門様、自分で選んだ道。音をあげてはなりません。お前さんは大変済まぬ顔じゃが、間違っても自害など考えてくださすな。お願いします。

もう一人の長右衛門 あの事件を起こしてから、はや十五年。何を考えて生きてきたんだろう。

お絹 長右衛門さま、あなたがいらっしゃるから、お母さんや義兵衛さんのいじめや辛い仕打ちにも耐えてきました。お絹は古い女です。あなたさまの度重なる夜の遊びも、殿方さまの力量・才能のうちと自分に言い聞かせてまいりました。長年連れ添う女房が泣きながらも認めた女遊び、何の遠慮もありません。

もう一人の長右衛門 お絹、言うな。

お絹 お半さんとあなたとの仲、お父様は私に知られまいと、噂話を一生懸命に打ち消し、出入りの人にもきつく口止めなさってくださいました。息子の女房への心遣い、有難くて、絹は手を合わせて拝んでおりました。

あなたがお半さんと割りない仲になられたことは、伊勢からお戻りになられた日に、直感でわかりました。でも愠気どころか顔へも出さぬは女の道理。あんたさまに絹の怒りや悲しみを見せては仕事に差し支えると、ひたすら隠し通してまいりました。

もう一人の長右衛門 わたしも女子の端じゃもの、大事の男を人の花。腹も立つし、愠気のしょうも、まんざら知らぬでなけれども、可愛い殿御に気をもませ、煩いでも出ようかと案じ過ごして何も言わず。

お絹 あなたの遊びがおさまりますよう、またお半さんと信濃屋さんに許しを求め、天の裁きをうけるため、六角堂へのお百度も。

もう一人の長右衛門 どうぞ夫にあかれぬよう、お半女郎と二人の名が、たたぬようにと。

お絹 願立てもいたしました。長右衛門様、こうになりましたらあなたさまと絹は運命共同体です。水に流るるも、天を翔ぶも一緒です。

もう一人の長右衛門 ククク、ククク、ルルル、ルルル。夫の膝に打ち伏して、くどき立つるぞいじらしき。ク、ク、ク、ク、クー。

長右衛門 コレ、女房、申し訳ない。お半さんとの出来事は釈明しても消えやらぬ。今日死のうか、明日死のうかと悩んでいました。さりながら、百五十両の金を祇園の女たちへの色使いと決めつけられては父上にも、お前にも申し訳がない。不名誉な疑いをかけられたのは私の落ち度である。何を隠そう、蔵屋敷からの百両は、恩ある人のために使いました。

お絹 それは、まあ！

長右衛門 また五十両の盗人は判明しています。しかし犯人を追求して、こと荒立てればみんなが不幸になります。百両と五十両、この大金の行方は説明つきますが、面目ないのはお半のこと。どうか勘弁してください。この通りだ。

お絹 あ、もし、お手を上げ下さい。自分の女房に何で詫げる必要があります。もったいないことをなさりますな。もう、このことはさらりと流して、二度とお気につけぬこと。

クロス 簡単に許してはなりません。

お絹　　いいえ、許します。されど長衛門様、利口そうに見えても、所詮女子は浅はかなもの。顔は菩薩に作れども、心は夜叉の裏表。絹はもとより女子であれば。

コロス　　女子であればと言葉でこそ語らねど。

お絹　　愷気は女の謹むところ。長衛門様、はかない女子の心根を不憫と置いていつまでも。

コロス　　見捨てず添うてくださいませ。

お絹　　おお、そうじゃ。また言いださぬための盃ごと。わしゃ肴こしらえよう。一つあがってちとお休みなされ。

長右衛門　　そんならそうしよう。ああ、気疲れからフラフラ眠りたい。

もう一人の長右衛門　　と思うても眠れるはずがない。お世話になったお父様、先立つ不孝をお許してください。一度ならず二度までも、女のことで死を急ぐ不所存を来世できっとお返しいたします。

　　お父様への親不孝、女房お絹への不貞不義、その理非の裁断は適っても、捌けないのは密かに巻いたお半の祝田帯。しよせん生きては言い訳立たず。せめて一筆、そうじゃそうじゃ。

長右衛門は遺書を認める。鐘が聞こえる。照明が一段暗くなる。

客席の背後から。コロスが大きな黒布を観客の頭の上に広げて持って出る。観客が完全に黒布におおわれる。経を唱えながら本舞台に登り、長右衛門に黒布をかぶせる。水音が大きくなって、鳥の羽音が高く響き渡る。

黒布が舞台全体を覆う。

行灯の灯りが点く。長右衛門が寝ている。お半が中庭から縁側に上がり、障子の棧をそっと叩く。

お半　　おじ様、おじ様、今朝、下さいましたお手紙のご返事をしに伺いました。おじ様、ちょっと目を覚ましてください。

長右衛門　　（はっと目覚めて、起き上がる）おお、お半か。

お半　　はい。おじ様のおっしゃること、よく分かりました。もう、これぎり、もうこれぎり忘れず。思い切ります。

長右衛門　　お半、思い切ってくれるか。

お半　　はい。

長右衛門　　お半、許せよ。

お半 おじ様、あかし帰ります。どうぞ、これからお元気で。これでもうお逢いできないのですね。見納めに、もう一度、お顔をお見せくださいませ。

長右衛門 お半、ここへおいで。

お半 はい。

二人は堅く抱き合う。長右衛門は彼女の手を振りほどいて。

長右衛門 笑ってごらん。そう、じゃ、さようなら。

お半 おじ様、これ切り、もう、これ切り。さようなら。

お半が駆け出す。長右衛門が後を追う。お半が黒布の中に消える。長右衛門の足下に、手紙が落ちている。彼は手紙を拾って行灯のもとに駆け寄る。

長右衛門 ナニ、「書置の事」。さては。(手紙を読む) なに、カ、桂川へ……桂川へ身を投げ候。ああ、お半！

再び黒い布が舞台一杯に広がる。長右衛門が布の下でもがく。首だけが黒布から出る。コロスたちが黒布を押さえている。

コロス 長右衛門様以外の人と結婚するつもりはありません。さりながら、日に日に大きくなるこのお腹、隠しようがありません。いずれどこからか石部の宿の仮枕、ほころびが出るに違いありません。

お絹さまへの詫びごとも母様への言いひらきも十四のお半には耐えられません。

ならば桂川へ身を投げ候儘……。

義兵衛が飛び出してくる。「見たぞ、聞いた

ぞ！」と言って、書置を奪い取ろうとする。長右衛門は義兵衛の足を取って、黒布の中に引きずり込む。義兵衛はもがきつつ、黒布の中に消える。

長右衛門は大きな黒布を引きずりながらお半の後を追う。岸野が柳の木の枝から出現し、長右衛門の手を引いて一緒にお半を追う。

布の真中あたりに帯屋と信濃屋の屋号の入った提灯を持った男女が二人を捜しにでてくる。しばらくして照明が容暗する。



金子 亨 「希望と不安の狭間で」

第73回独立展 200号

## 第三場 コロスの法廷

京都保津川のアシオパゴス Areopagus<sup>13</sup>

中央にコロスたちが座る。上手に長右衛門、岸野、お半がヒソヒソと話をしている。下手に繁齋、お絹、おとせ、義兵衛、長介が激しく議論している。

コロスの長 コロスたちよ、それから原告・被告の人間のみなみな、席につきなさい。この道行き「鏡の間の法廷」にわれわれが集う間は、私の裁定に従うよう、あらかじめ申し渡しおく。

(岸野とお半に向かって語りかける) 岸野よ、ここは、生きているものの心の中の裁きの場である。黄泉の国の住人であるそなたには発言権は認められていない。ただし当方からコメントを求めた時のみ、発言が許可される。この約定を心得ておるか。

岸野 はい。愛する長右衛門殿を弁護するために、岸野は出廷いたしました。

コロスの長 (おとせ、義兵衛に向かって) ではまず、おとせさんと義兵衛殿、原告側が最初に訴追の一部始終を申し立てられる事を求めます。

おとせ 訴えたいことが山ほどありますが、手短に済ませましょう。(長右衛門に向かい) 訊ねることに、端的に返事をしておくれ。まず、最初にと、お店の百五十両を横領しましたね？

長右衛門 訳あって、百両は他へ流用しましたが、決して横領などではありません。五十両については知りません。

おとせ 無断で流用するのは、横領ではござらぬか？

もう一人の長右衛門 お店の正式のオーナーは私であり、お店の経営にとって緊急の支払いが必要となったので、そちらにまわしまし

---

<sup>13</sup> アテネ、アクロポリス北西の丘、アイスキュロスの『オレスティア』第三作『エウメニデス』の裁判シーンはアレオパゴスである。裁判長・アテナ、被告・オレステス、原告・復讐の女神(エリーニュース)



た。もちろん会長である父様・繁齋殿には許可を頂いております。

おとせ　　しかし繁齋殿の妻である私には一言の相談も、また報告もありませんでしたよ。

長右衛門　父様には、母様にお話ししないよういわれていましたので。

義兵衛　　自分の母親には報告すべきではありませんか。また経営にタッチしている弟の義兵衛にも一言お話しくださるべきではございませんでしたか。

もう一人の長右衛門　それは必要ありませんね。おとせさんは後妻であり、現在のところ、お店の経営にコミットする権限は与えられていません。また義兵衛さんは、何の役職にもついておられません。ご自分では取締役のつもりであれこれ口をはさんでいられますが、今後は慎んでください。

義兵衛　　な、何と。今の言葉は私に対する侮辱だ。取り消しなさい！

コロスの長　　（義兵衛を制して）そう興奮なさないで。取り消すべきかどうかは、私が判断します。おとせ殿、次の質問に移りなさい。

おとせ　　コロス様、あなた様に伺いますが、長右衛門奴は、帯屋の經理から百五十両をかすめ取った事実を肯定なさっているのですか。是認なさっていますか。その上で、長右衛門奴が弁明した百両の横流しは正当な行為だと御認知なさっているのですか？

コロスの長　　なかなか論理的な御議論がお出来になる。そなたの一連の質疑が出尽くしたところで、私が判断する。質問を継続しなさい。

義兵衛　　では、金庫から消えた百五十両について御訊ねする。疑いなくお兄様の懐に入ったに違いありません。五十両を何に使ったのですか？ 色町で、女郎につぎ込みましたかな？ それともお半さんとの手切れ金に使いましたかな？

長右衛門　母様とあなたに金庫を開けるようせまられて、開けてみるまで、紛失していることを知りませんでした。

おとせ　　お半さんとの手切れ金に使ったのではあるまいかな？

もう一人の長右衛門　五十両の金の行方をあまり厳しく詮議しない方が身のためではござらぬか！

義兵衛　　何、何とおっしゃった！

もう一人の長右衛門　今、人をやって、おとせ殿の長持ちの中の漆塗りの文箱を改めてもらってもいいんだが。

義兵衛　　母上だって五十や百の金は持っていらっしゃる。

おとせ　　これ、義兵衛。つまらぬ口争いはまた次ぎにしや！

長右衛門　母様、このことは言うまいと思っておりましたが、ことがここまでこじれては、素直に真実を明かします。

女房お絹に才二郎と申す弟がおります。弟の許嫁雪野女郎は訳あって遊女に売られる折も折、二人から相談を受けた私が才二郎と雪野を助けるための手付けの百両として、お店のお金を使いました。

お絹 あなた、雪野の身代金を払うため……

繁齋 お絹、気にかける必要はない。これ、おとせ、その百両はこの繁齋が払ってやった。長右衛門の女房の弟と言えば身内も同じ。その弟のために、向こう五年間で四百両を払う条件で貸し出した。

義兵衛 そんな高利で。返せるわけがないでしょう。

繁齋 返せるか返せないかは、お前が口出しすることではない。返せなかったその時には、二人の命を差し出してもらわにゃなるまい。

おとせ よくもそんな大枚を！

繁齋 こりゃ、おとせと義兵衛。くどくは言わぬが、心して聞き置け。お前ら親子には、女房として、また後妻の連れ子として、何一つ不自由のない暮らしを与えている。美味しいものを食べ、きれいな恰好をして、行きたいところへ行かしてやっている。商売は顔と付き合いと愛想だ。わしと長右衛門は一生懸命帯屋という暖簾を守ってきた。お前たちに見よう見まねでお店ごっこを楽しみ、聞いたような口の聞きよう、もう聞き飽きた。あげくの果てが帳簿を開けたり、断りもなく金庫の中を改める傍若無人は商人の道にもとる行為。儉約、勤勉、蓄財。欲を離れ仁を心がけ正しい道に適えば自ずから栄えるのじゃ。これが石田梅岩先生(1685-1744)がお教えの商人の道じゃ。

今後は帳簿を見ることもならぬ。ましてや金庫を開けることも、お店の金に手を触れることもまかりならぬ。

おとせ 言うことはもうそれ切りか。イヤサ、ぬかすことはもうないか。コレ義兵衛、わしはもうお絹や長右衛門にここをいびり出されるであろう。あっちから出されぬうちに、こっちから出て行こう。コレ義兵衛、椀と箸を持ってこい。エエ持ってこいというに。

母の意をくみかねたが、義兵衛はともあれ奥から椀と箸を持ってくる。おとせは着付けを脱ぎ、襦袢一つになり、椀と箸を持って部屋の出口で外に向かって。

ハイ、ご近所の衆、聞いておくれなさいませ。わしはこの年になって、嫁のお絹さんや長右衛門さんにいびり出され、今日から乞食致します。ハイどうぞおあまりを下さいまし。

お絹 モシ、母さん、どうぞご機嫌直されてお帰りなされてくださいませ。

おとせ そんなら帰ってやろうが、これからわしが言う通りになり、また酒も飲むが、決して告げ口はせぬな。

お絹 はい、おっしゃる通りに致しまする。

おとせ そんなら帰ってやろう。もしまた背くとわしは乞食、「はい、お余りを！」。

お絹 ア、モシ。

義兵衛 (母親の袖を引いて) 母者人、義兵衛は、お絹が欲しゅうございます。お半のことを告発して、長右衛門との中を切り裂いてくださいませ。

おとせ これ慌てるな、息子や。はかりごとは慎重に進めないといかん。(せきをして) これ、コロスの衆。身内の長男の悪口ばかり申し立てて、さぞかし、お聞き苦しいことと思います。ただ、世の中に嘘偽りがまかり通るようでは、義理人情も色あせてしまいます。ましてや親子兄弟の間で、秘密を抱えることは決してあってはなりません。だからこそ、身内の恥を忍んでお話し申し上げた次第です。

さて、言いにくいことなれど、裁判であれば隠し通すことはなりません。まだまだ滅相なことがあるわいのう。

これ、長右衛門殿、隣の娘お半とそなたが不倫の関係になってイチャイチャ・ニャンニャン乳繰り合っていると近所からの告げ口。年端もゆかぬお半とよもや淫らな事はあるまいと思うたが、如何ともしがたいコレこの手紙。

義兵衛 母者人、その続きはこの義兵衛に。(手紙を受け取って) こちらあたりから読み上げようか。「伊勢参りの下向の道。石部の宿の仮枕。今しも忘れ兼ね参らせ候。どうぞやどうぞや、今一度嬉しきお目もじを願い参らせ候。長さままいるお半より。」

イヤませたりな、ませたりな。アノここなガキ奴の、小へげたれめが！

おとせ のう、コロスの皆様、こりゃ大それた不義いたずら。恩ある信濃屋の小娘をそそのかし、嫁入りの邪魔をおのれまあようしおったよな。これ親父殿、長右衛門にガミガミ言うが無理か！

コロスの皆様、ねたみそねみはさておいて、性悪婆と陰口叩かれるこのおばばでも、どう判断してよいか知れませぬ。どう

か天道さまに背かぬよう、徳のある正義の裁きをお願い申し上げます。

繁齋 (側へ呼んで。小声で) 長右衛門、もし訴えの通りなら、そ  
ちや、情けないことしてくれたな。

お絹 父様、お待ちください。コロスの皆様、お絹の申し立てをお  
許してください。

義兵衛 お絹さん、黙って引っ込んでいてください。

お絹 この問題は長吉さんの説明で決着がついていたはずですよ。

義兵衛 あんな説明を認めるわけにはいきません。お絹さん、私の邪  
魔をしないでください！

コロス こりゃ、義兵衛殿、裁判の邪魔立てをするな。お絹さん、申  
し立てを許す。申してみよ。

お絹 ありがとうございます。お父さま、手紙の文言だけをお聞き  
なされては、お腹の立つは尤もなれど、長吉さんの証言通り、  
長右衛門さまに不義はございませぬ。コロスの長さま、そりゃ、  
相手が違いました。お半さんの長さまは別のお方さまです。

義兵衛 あ、これこれ、お絹さん、さりとてはさりとては。今読んだ  
をどう聞かしゃったの。長さままいるの長さまが別人だと？

お絹 長吉さんが言ったでしょう。その「長さままいる」がきつい  
間違い。お半さんの相手は、隣の内の子飼の丁稚、長吉どんじゃ  
わいの。

義兵衛 エエ、何じゃ、ハ>>>>、コリヤ臍が京鹿子道成寺を踊る  
わえ。ハ>>>>、コレ長吉よ、長吉よ、長吉よ、ここへ出て  
きなされ！

長吉 へーい、へーい、へーい。人の名を軽々しく三度も呼ばない  
でください。おかげで返事も三度になってしまいます。

義兵衛 コリヤ、長吉。お前とそちのお店のお半お嬢が懇ろにしてい  
ると妙な噂。そんな噂、覚えないと、ソレ、さっぱりと言うて  
しまえ。

お絹 コレコレ、長吉殿、ここへおじゃ。それ合点か、覚えのある  
事言うたがよい。(と目配せをする)

長吉 コロスの皆様、ちっくり面目ないが、エエアノ、伊勢参りの  
戻りにナア、石部の宿でちっくりと面目ないが、お半さんと夫  
婦事。ハイ、それ以降、懇ろにしておりますからは、お半さん  
はわしが女房。すみません。

義兵衛 コレコレ長吉、冗談言うな、嘘言うな！ お前のようなはな  
垂れ小僧に、何でそんなこと出来るものか。

長吉 オヤ、義兵衛さん、お前おかしなことをいいなさるが、はな  
垂れ小僧では色恋ができませんか？ まず、お染久松、これも  
はな垂れ小僧。安珍清姫、これもはな垂れ小僧。白井権八小紫、

これもはな垂れ小僧、信濃屋お半に丁稚の長吉、これもまさしくはな垂れ小僧。それにそら聞くところによれば、ロミオとジュリエットも十四歳と十六歳のはなたれ小僧。

義兵衛 エエ、やかましい。何をぬかすぞ。コリヤ、この手紙に長さまいるお半より。

長吉 エエしちくどい義兵衛さん。長さま参るは、おはもじながら、この長吉。

義兵衛 煩い、うるさいうるさい！ 貴様のようなはな垂らしが、何でそんなことが出来るものか。この長の字は兄貴長右衛門の長の字に違いない。

長吉 モシモシ義兵衛さん、そりゃ差別だ！ 格差社会の典型的な事例だよ。はな垂れ小僧は金にも恋にも縁がない。何ですか、これから後は、帯屋の長衛門様の長の字は、長の字の上に純金のティアラを書いて金冠長、わしの長の字は鼻水編に長の字を書いてはなみず長と差別化をはかるのですか？

コロスのみなさん、御評定はいかがでござる。ハイ、さようなら。

コロスたちが大きく笑う。長吉は、逃げ出そうとする。おとせと儀兵衛が長吉を追いかけ回す。とど長吉は逃げ去る。おとせと儀兵衛はお絹に食ってかかる。

コロスの一 これ、静まれ、静まれ。さて、長右衛門殿に伺う。そなたは十五年前、ここにいる岸野さんと心中未遂を起こしましたか。

長右衛門 はい。帯屋の若旦那で、世間知らずのわたくしは岸野さんにすべてがおんぶに抱っこ。心中しまししょうとうながされ、半染の手ぬぐいで頬かぶりし、手と手をとって、よろよろ歩き。気がついたら、桂川のほとりに来ていました。

もう一人の長右衛門 それなんだよ。いつもいい顔をしやがって、女の機嫌取りをするからこんなはめにおちいるんだ。俺の身にもなってくれよ。いい恰好しいの 長右衛門！

長右衛門 そういうわけじゃないんだ。おれだって必死になっているんだが、女性には勝てないんだ。いつも後からついて行ってしまいうんだ。

コロスの一 もう一度聞きます。そなたは十五年前、ここにいる岸野さんと心中未遂を起こしましたか。

長右衛門 はい。

コロス一 岸野さんが勝手に道行きを決めて、そちは唯々諾々と手を引かれて行ったと言うのか。無責任に聞こえるが。

もう一人の長右衛門 だから何も言うなって言っただろう。言い逃れできなくなってしまうじゃないか。

長右衛門 はい。無責任に聞こえるかもしれませんが、その通りです。  
(もう一人の長右衛門に) ほんとのことを話すのがいいんだよ。  
あんたはいつも先を読んで話をするようにと言うけど、どこかで矛盾が生じるんだよ。

もう一人の長右衛門 いつも問題と正面から向かい合い、最高の答えを創造しなくちゃ。

長右衛門 その言葉に惑わされてしまうことが多いんだ。お半さんのことだって、私が部屋を逃げ出せばよかったのだ。でもお前が男ならお半さんを説得して部屋へ返せって言い張って……。

もう一人の長右衛門 お前が十四の小娘の誘惑に負けるからいけないんだ。

コロス一 お半さんが死ぬ気であることをご存知かな？ いま桂川の中州で、浅瀬に跪いて祈りを捧げている。コロスの仲間がお半さんの時を止めて法廷の結果を待っているところじゃ。

長右衛門 はい。どうしたらいいのでしょうか？

もう一人の長右衛門 いちいち人の意見を聞くんじゃないよ、自分で考えろよ。秘密を隠してでも生きるか、全部をばらして楽になってお半さんと道行きをするか。お絹のためにも、父上のためにも、おれたちは我慢して生きなければいけないんだよ。

コロス二 長右衛門殿、早く裁判を終わらせたいのじゃ。おとせさんと義兵衛殿は、百五十両の金の行方を問題にしている。百両は才二郎殿と女郎雪野のために使われたことが判明している。繁齋殿もお絹さんも、そしてコロス法廷も問題にしないだろう。二人が訴追している残りの五十両は、何を隠そうおとせさん親子がくすねたことは調べがついている。繁齋殿は二人がくすねたことを知っているが、これを糺すつもりはないという。

コロス一 さて問題は、信濃屋のお半さんとの出来事じゃ。おとせ親子は、お絹さんの弁明を信じていない。お半さんが長吉のくどきを受入れるとはだれ一人信じないだろう。信じられないが、長吉がああいうからには、長さまが長吉だとする説明をだれも否定できない。従っておとせ親子は、十四歳のいたいけな少女と枕を共にした不埒な男を帯屋の主人にしておくわけにはいかないと、追い出しにかかるだろう。しかしいくらわめいてもこれは成功する可能性はほとんどゼロだ。

コロス二 お絹さんと繁齋殿は石部の宿での出来事は事実であると認識している。お絹さんは現実を認めて、黙認するだろう。繁齋殿

は信濃屋に詫びいれ、おそらく剃髪して山にこもるものと推測される。もちろんおとせさんとは離婚し、それなりの金を与えて親子二人を帯屋から追放するだろう。

暖簾をどうするつもりかは、いまのところわれわれコロスには繁齋殿の心は読めていない。

コロス一　しかし問題は、お半さんが死ぬ気であることだ。彼女が懐妊しているのをお絹さんは承知している。何らかの手を打ってくれるだろうが、お半さんはすでに自殺する覚悟で家を出て、どう辿ったか吉祥院石原で堤を降りて、桂川の浅瀬に佇んでいる。しかも十五年前の岸野さんの場合と同じように、長右衛門殿が運命の糸に引っぱられてその後について行っていることじゃ。

コロス二　これ、長右衛門殿。お前はお半さんを追っている自分の姿が見えているのか。

長右衛門　ああ、見えています。

もう一人の長右衛門　おい、長右衛門。ストップ、ストップ。お半さんを止めるんだよ。心中してしまうところじゃないか。

長右衛門　すまん。わたしは感情に溺れてしまうのだ。

もう一人の長右衛門　いいカッコするな。女性に一言いわれると、すぐ乗ってしまう。要するにお調子者なんだよ。

長右衛門　まあ、そう攻めるな。お半さんは一人で死ぬ気であるよ。困ったなあ！　もし心中を止めろと言ったら、お半はどうするだろう？　ともあれ、わしは「お半、待て」って追いかけ、袖をつかまえる。

もう一人の長右衛門　お半の片袖が破れて、宙に舞う。長右衛門は腕をのばしてお半の帯をつかんで引き寄せせる。帯がほどけてお半はくるくるくる。

長右衛門　年端も行かぬ美少女を長右衛門ははっしとばかり抱きしめる。

もう一人の長右衛門　おらおらおら！　ちょっと誘いをかけるとすぐ乗って。石部の宿で、お前は どうしてお半さんの誘いにのったんだよ。まだ十四歳だよ。あのとき、お半さんに手を出すなって言ったら、うん手を出さないって約束しただろう。

コロス一　難題は、岸野さんの存在だ。彼女は十五年の歳月を経て、蘇ってきた。そして長右衛門殿への思いを遂げようとしているように見える。

コロス二　石部の宿で、長右衛門殿がお半さんに誘惑されたのも、きっと岸野さんの霊が導いたに違いない。長右衛門殿は岸野さんとお半さんの区別がつかなくなってしまったのだ。ここは端的に岸野さんと長右衛門殿の二人に事実を確認するのが一番だと思う。

クロス　　では、父親繁齋殿とお絹さん、おとせさんと息子義兵衛殿も退席させて控えさせよう。

クロス一　　繁齋殿と嫁お絹さん、またおとせさんと息子義兵衛殿も別室で控えていなさい。案内してください。

繁齋とお絹が退場する。

おとせと儀兵衛も退場する。

クロス　　さて、岸野さんと長右衛門殿、前へ出なさい。岸野さん、お半さんは今どうしていますか。

岸野　　彼女は死への恐怖からさっきまでは柳の木にしがみついて祈っていました。今は浅瀬に膝をついて、震えながら祈っています

クロス　　わかった。もうしばらくそっとしておこう。岸野さん、異存ありませんね？

岸野　　はい。

クロス　　協力ありがとう。お礼を申し上げる。その上で訊ねたいことがもう一つある。

岸野　　何なりとお訊ねください。

クロス　　十五年前、そなたの亡がらが蛇籠に抱かれるようにして沈んでいるのが発見された。岸野さんの単独入水事件として処理された。しかし巷では、長右衛門殿が心中の直前に怖じけついて、菊野さんを捨てて逃げ帰った、との噂が語られてきた。岸野さん、あの事件は、そなたの単独入水事件なのですか、それとも長右衛門殿との心中事件だったのですか？

岸野　　それは……

クロス　　岸野さん、そなたの知恵と力を借りたいと思っている。そなたは長右衛門殿への愛情を消し去ることができず苦しんでいるのではありませんか？

岸野　　はい。しかし、あの時長右衛門さんを許しましたし、今でも許しています。

クロス　　十四歳の隣家のお嬢さんを誘惑したと聞いたなら、普通なら逆上しても当然でしょう。

岸野　　私は長右衛門さんを許しています。彼はお絹さんに対して実に誠実に生きてきました。私は喜んでさえいるのです。

クロス　　お半さんをどう思っていますか？

岸野　　お半さんは純で、情熱的で、おませな子です。彼女はお絹さんを敬っていました。お絹さんが愛情を注いでいる長右衛門さ



んを見るにつれ、お半さんは長右衛門さんを愛しくなったのです。

十四歳の少女と侮ってはいけません。彼が欲しい、夫婦になりたいと思うようになりました。

お半さんは一度、叶わない恋を清算しようと思いました。桂川の上流の保津川下りの船に乗って入水する場所を探していました。その時、水底にいるあたしと目が合ってしまった。彼女は「お半をそこへ連れて行って下さい」と訴えてきました。わたしは拒否しました。「生きなさい、若いのだから生きなさい。自分で答えを見つけなさい」と言いました。それから彼女は数回保津川下りの船にのり、わたくしに会いに来ました。

クロス お半さんと目が合ったとき、あなたはお半さんに自殺を思いとどまるように説得したのですか？

岸野 はい。

クロス あなたはお半さんに請われてタイムスリップし、精霊となって彼女の魂と付かず離れずいたのですか？

岸野 はい。お半さんの死への願望に誘引されて、タイムスリップしました。彼女のスピリットは岸野を離してくれませんでした。お半さんの死へのこだわりは、純粹で、止めようがないほど激しいものでした。

クロス 長右衛門殿とお半さんの情事をあなたは画策しましたか？

岸野 いいえ。

クロス あなたとお半さんが保津川ではじめて目を合わせたのは、いつ頃ですか？

岸野 石部の宿の事件が起こる半年位前のことです。

クロス 石部の宿でのあなたの役割は何だったのですか？

岸野 お答えできません。語れないこともあるのです。

クロス お半は一人でも死ぬ気でいたのですか？

岸野 はい。私はある事実を告げて、彼女を思いとどまらせることができるか観察しました。けれども事実を知ったらいつそう死を急ぐに違いないことが分かりました。

クロス その事実とは？

岸野 お話しできません。

クロス それは困りましたね。

岸野 そうですか。でも規律を破るわけにはいきません。もはや人間でなくなったものの世界の規律です。

クロス 公平な裁きをしたいと思いますが、行き詰まっています。もしお半さんに聞いて、彼女が話す分には問題がありませんか。

岸野 はい。ただお半さんはこの事実を知っていないのですから、聞いても無駄ですよ。

クロス 分かりました。（廷吏に）お半さんをお呼びください。つかぬ事を伺いますが、今生きている人間たちの過去が見えているとか、未来が見えるとか？

岸野 よく見えます。邪魔な程よく見えます。

廷吏がお半を連れて登場する。

お半 ああ、岸野さん。あたし、先を急いでいるのです。それなのにこうして引き止められて……。

岸野 この方達が、あなたに聞きたいことがあるそうです。

お半 そうですか。その前に長右衛門様はどこにいらっしゃいますか？

クロス ここは法廷です。いま帯屋の横領事件について調べています。またそなたと長右衛門殿の不義についても調べています。

お半 私と長衛門様の不義ですって！ とんでもございません。私は純粹にお慕い申し上げていたのです。岸野さん、長衛門様はどうしていますか？

岸野 まず、こちらの質問に答えなさい。

お半 いいえ、まず私の質問に教えてください。

クロス これ、お半さん。落ち着きなさい。あなたはどのようにして岸野さんを知っているのですか？

お半 （びっくりして）はあ？ 分かりません。でも昔から知り合いなんです。

クロス いつ頃からですか？

お半 分かりません。そんなことが重要なんですか？

クロス 十ヶ月ほど前、保津川で岸野さんに逢ったのではありませんか？

お半 知ってるんじゃないですか！ 知っていながら何故聞くんですか！ 岸野さん、長右衛門さんは責められているのですか？

クロス 保津川下りで、あなたは岸野さんと遭遇した。あなたは岸野さんをこの世に転生させた。お半さん、あなたの死への願望が転生の触媒、すなわちカタライザーとなったのですか？

お半 カタライザー？ どうして難しいことを聞くのですか？

岸野 私に説明させてください。わたくしは長右衛門さんを忘れることができず、逢いたい逢いたいといつも水底から寺の鐘の音を聞いていました。ある日、長右衛門さんがお半さんたちを連

れて保津川下りの船遊びにきました。その時はじめて、水底のわたしとお半さんの目が合いました。

その時はそれで終わりました。十年たって、再会しました。今度は二人の目ががちりと絡み合いました。黄泉の国のわたしが、手練手管に長けたわたくしが、お半さんの死を求める尋常でない力に誘引されてしまったのです。

クロス お半の心や頭の中をあなたが支配しているのですか？

岸野 いいえ。はっきりしていることは、お半さんの頭の中にある心中したいという考を変えることができました。

クロス その理由は、長右衛門が心中しようとしなかったからではありませんか？

岸野 それはないと思います。私が心中を思いとどまらせたのは、長右衛門さんとお半さんが心中してはならない決定的な事実があるからです。しかしそれは言えません。それを話したら、お半があまりに可哀そうです。

クロス 話してくれませんか。

岸野 どんなに責められても、これだけは言えません。

クロス 石部の宿で、契った相手は丁稚の長介ではなく、帯屋の長右衛門ですね？

お半 (無言)

クロス 帯屋長右衛門に手紙を出しましたね？

お半 (無言)

クロス あなたのお腹に赤子がいますね。

お半 (うなづく)

クロス あなたは一人で桂川に身を投げるつもりですね？

お半 (無言)

クロス 最後に聞きにくいことをあえて聞く。あなたが長右衛門殿と枕を重ねた時、愛の行為が行われたのではなく、心が肉体を超越し、あなたと岸野さんが同じように愛の達成感を感覚したのではありませんか？

あまりに難解な質問に、お半が岸野を見る。岸野が小声で質問を砕いて説明する。

お半 (岸野を見る) 何を言いたいのですか？

クロス 違いますか？

お半 (無言)

クロス どうしても答えたくありませんか。よろしい。これから私たちが協議をしますので、そのまましばらくお待ちください。

クロスたちが舞台前に集まって相談する。

クロス さて、裁判をどう進行したらいいですか？

クロス一 岸野が証言しようとしな。お半も口を閉じたままである。岸野は何を隠しているのだろう。

クロス二 もう少し強く岸野にせまったら話してくれるのではなかろうか。

クロス どうだろう、女性のみを集めて詮議してみたら。女性たちは男性たちより問題を直視する力があると思う。きっと事件を曖昧に処理しないで、合理的な回答を導き出すだろう。

クロス 私もそう思う。

クロス三 賛成だ。諸君そうしないか？

クロス一同 それがよかろう。

クロスたちが元の場所に戻る。

クロス では、帯屋長右衛門の妻お絹、信濃屋お半、岸野はここへ残るように。他のものは別室にて控えるよう。

一同、座を改める。岸野とお絹はクロスに指示されて、舞台中央に進み出る。

クロス 問題点を整理する。お半さんは、長右衛門殿と夫婦の契りをした。しかも妊娠している。一緒になれないなら、生きているよりも死を選びたいと、桂川の岸辺に佇んでいる。

今回の事件の全貌を一番よく知っていると思われる岸野さんは、解決の糸口となる秘密を明かそうとしない。その秘密は明かしてはならない天と地と人を支配する法則だと言う。

岸野さん、もう一度聞く。話してくれませんか。

岸野 話すことができるなら、とっくに話しています。

クロス 私たちは、人間ではありません。私たちは年を取ることも死ぬこともできない存在です。もう数世紀にわたって生きてきました。人間のために欲望や不正を糾すためにのみ生きているのです。哀れな存在です。私たちに話しても問題は生じないと思いますが。

岸野 先例がないのです。したがって今はお話できません。

クロス 困ったことだ。岸野さん、元の控えの席へ戻りなさい。

岸野が下手の場所に戻る。舞台にはお絹一人が残る。

クロス さて、お絹さん。

クロス二 お絹さん。

お絹 はい。

クロス二 あなたは高潔な方だ。そのお方が、なぜ長吉にお金を渡して、手紙の受け取り主は長吉であると言わせたのですか？

お絹 事実だからです。

クロス二 わたしは違うと思います。石部の宿でお半さんと契ったのは長右衛門殿ではないと言うのですか。お半さんのお腹の赤子は長右衛門殿の子どもではないと主張なさるのですか？

クロス あなたの落ち着いた態度が解せません。長右衛門殿は少女お半さんと靈魂の岸野さんの化身に惑わされて一夜をともにしたのではありませんか？

クロス お絹さん、長右衛門殿の不義は認めながら、何か答えを持っていますね？ それは何ですか？ お話ください。

お絹 (黙っている)

クロス四 お訊ねしますが、あなた方にはなぜお子さんがいないのですか？

お絹 (突然、泣きだす)

クロス四 やはりそうでしたか。あなたが黙っていては、長右衛門殿は真の意味で救われないと思います。おそらくお半さんは入水し、ご主人はお半さんと岸野さんの魂に引かれて黄泉の国へ旅立つでしょう。

クロス二 さあ、お絹さん、正直に話してください。

お絹 あの人は、長衛門様は、**クラインフェルター症候群**を病んでいます。

クロス二 **クラインフェルター症候群**って何ですか。

お絹 無精子症のことです。

皆々 おう！  
お絹 つぼみのようなお半さんに引かれて、主人が一夜、枕を共にしたことは事実だと思います。そのことは大変申し訳なく、私も主人も一生かけて償うべきだと考えています。  
それでもわたしは夫を許せるのです。子どもを作れないことを知ってずっと悩んでいました。力づけようがありませんでした。  
お正月が明けてから、主人の様子がおかしくなりました。下駄の音や襖の開け閉めの音に驚くようになったのです。しばらくして寝ている最中に、長右衛門様は寝言で岸野さんとお半さんに詫びるようになりました。岸野さんとお半さんの区別ができなくなっているようでした。  
だからお二人に道行きを乞われれば、口先では断りながら、夢遊病者のようについて行区のではないかと……。

クロス でもあなたは長吉をたぶらかして、事実を隠そうとしましたね？ どうぜんお半さんに漏れる話ですよ。結果的にはお半さんを苦しめることになりませんか？

お絹 おっしゃる通りです。ただ母親のおたねさんと義兵衛さんの追跡だけは避けたかったのです。お半さんには裁判のあとでほんとのことを話して、何日かかろうが話し合っ解決しようと考えていました。

クロス そうでしたか。岸野さんをここへ呼んでください。

岸野が舞台前へ出てくる。

クロス 岸野さん、あなたはお半さんの性格についてこうおっしゃいましたね。（記録を見ながら）「心中しようとするお半さんの考を改させることはできても、一人で死のうとする考えを改めさせることはできません」と。さらにこうもおっしゃいました。「けれどもあの子は事実を知ったらいつそう死を急ぐに違いありません」と。  
その事実とは、石部の宿で長右衛門殿とお半さんは肌を合わせたものの、愛の行為そのものをする必要はなかった。お半さんと岸野さんは異常な情念に翻弄されて目映いばかりの精神的昇天の瞬間を共に迎えたのではありませんか？

岸野 (無言)

お絹 そんなことができるのですか。アナ、恐ろしいことです。間違いですよね、違いますよね？

岸野 お絹さん、お許してください！  
お絹 ああ、なんという残酷な話だろう。私は寒い、寒いわ！  
岸野 お絹さん、お許してください。  
お絹 (泣く)  
コロス さて、どうしたものか。  
コロス 岸野さん、長右衛門殿はクラインフェルター症候群を患っていることをご存じでしたか？ (岸野、ちょっとたじろぐ) つまり、彼は子種を持っていないことを知っていましたか？  
岸野 本当なんですか？ 嘘ですよ！  
コロス いいえ、本当です。  
岸野 誰がそう言ったのですか？  
コロス 長右衛門殿がクラインフェルター症候群であることを一番よく知っているのは誰だと思いますか？  
岸野 ああ！ そう！  
コロス お絹さん、岸野さん、コロスの仲間たち。ここまで事実が明らかになると、問題点は、いかにしてお半さんに死をお思いとどまらせるかということだ。その他の争いはどうにでもなる。そこでだ誰かがお半さんに事実を語り、説得し、彼女の将来を後ろ盾となって見守ってやる必要がある。  
コロス わたくしはお絹さんに対応をお任せするのが賢明だと思います。でも不憫でならない。十四歳の少女が、恋を追い求め、頭の中で一夜の契りを結び、頭の中で妊娠したと喜んでいるのに、あなたは妊娠などしていなと説得するのは、実にいまわしい役目です。  
コロス お絹さん、大役を引き受けてくれますね？  
お絹 なぜ、コロスの皆さんが解決に当たらないのですか？  
コロス 悲しいかな、コロスには若い少女の信頼を勝ち得る人格がないのです。理屈で押すだけでは、お半さんは納得しないでしょう。大人の女性、しかも長右衛門殿をよく知っている方に話してもらったら、彼女も……  
お絹 可哀そうなお半さん。十四歳のお嬢さんが身ごもったと思っ込み、喜びと罪悪感の波に翻弄されながら桂川へ身を投げようとしている。そのお嬢さんにむかって「あなたは妊娠していのよ。あなたの身体が妊娠に似たいろいろな反応を示すけど、妊娠したとお思い込んでいるからなの。生理が遅れる、少し強めの胸の張り、吐き気がする、おなかが張る、いらいらにしても、みんな心がもたらす症状なの」とわたしに言えるかしら？  
コロス (黙ってうなづく)  
岸野 お願いします、お絹さん。

お絹 私は出家するつもりです。長右衛門様を深く愛していますが、あの人は人間ののりしろが広すぎます。岸野さんとのことは、存じて嫁いできました。幼かった私は、心中を企てる男性にロマンティックな憧れさえ感じていました。

芸妓さんに惚れたとか、義太夫のお師匠さんに惚れたとか、そういうことなら我慢ができます。きっとあたしは泣いて、怒り、死ぬとか別れるとか騒ぐでしょうが、長右衛門さんを許すことができます。

でも、お隣の、しかも十四歳のお半さんと情を交わしたことは決して許されることではないでしょう。夫の罪は妻の罪でもあります。古い考え方と言われても、お絹は夫の罪を、咎を背負って生きていきます。

最後に、夫が、お半さんだけでなく、お半さんの肉体を仮の宿りとした岸野さんとも枕を重ねたのなら、夫の行いは神や仏の教えを大きく踏み外しています。夫は、人間の姿をしていても、もはや魂を売り払った「いきすだま」です。

私は、死者とまぐあった男を夫として受け入れることはできません。

私はお半さんに真実を語った後、彼女を連れて出家します。あどけない尼と色気のある尼。いいコンビかもしれません。

クロス 帯屋と信濃屋はどうなると思われませんか？

クロス一 両家ともに混乱に陥り、帯屋も信濃屋も老舗の暖簾を外すことになるでしょう。

クロス二 お絹さんは仏門に帰依するという。長右衛門さんはどうなさるか、ご自分でお決めになるのがいいでしょう。

お絹 長右衛門さんはリアリストですから、私がお半さんと出家することを知ったら、お芝居のように悲嘆、悲哀した後、一転して仕事に精を出すかもしれません。しかしそれもうまくいかないような気がします。お灯明の油が切れても、自分では油をさすことに気づかない人です。暗闇の中に座って、誰かが油をさしてくれるのを待つでしょう。

可哀想だけど、岸野さんのところへ帰るのが一番かもしれません。そう思いませんか、岸野さん。

岸野 わかりません。私には生きている人について関わってはいけない掟を破りました。その結果がこの悲劇です。お許してください。

クロス だいぶ答えが見えてきましたね。お絹さん、これから桂川へ赴き、半さんの死を思いとどまらせるため、重たい事実をお話ください。そして是非お二人と一緒に女僧への道を歩まれるよう願ってやみません。不謹慎ですが、お二人して美しい尼さん



になっていただきたい。長右衛門殿はご自分の判断に従って行動してもらおう。岸野さんのところへ赴くもよし、繁齋殿に寄り添うもよし。

お絹 お父さんはきっとお店をたたんで、信濃屋のご夫妻と一緒に信州伊那の山奥に隠居なさると思います。

コロス これで判決文のプロットはほぼ決定したとってよかろう。コロスの皆さんには異存ござらぬか。(皆々、うなづく)では関係者を全員呼び入れてください。

コロス 帯屋繁齋、同人つま・おとせ、息子・義兵衛、信濃屋の娘・お半、信濃屋丁稚・長吉。以上のもの、所定の場所に着席せよ。

正面にコロス、上手に岸野とお半、下手に繁齋長右衛門、お絹、おとせ、義兵、そして長吉が座る。

コロス 審議の結果を申し述べる。まずお絹殿は桂川へ赴き、お半さんに事実を告げ、心の傷を癒すためにできる限りの支援をしてあげてください。それから丁稚の長吉はお絹さんに同伴して手伝いをする。しかとお任せしましたよ。

お絹 はい。

長吉 へ、へーい。命をかけてお手伝いします。

おとせ あの、コロス殿。私たちの訴えは？

義兵衛 そうですよ。百五十両の不明金とお半さんとの不義密通……

コロス 後刻、申し渡す。それまで徒らに騒ぎ立てずに待つのが。余分な介入は厳しく処罰する。

百五十両のうち、為替の百両の使い道は明白になり、繁齋殿がその用途を認めたからには、訴訟の事案から外さざるを得まい。ところでお若い義兵衛殿、五十両については、強く申し立てない方が得策ではなかろうか。あとで秘密の在り処が暴露された時どう言い抜ける考えておく方が賢明であるぞ。おとせ殿、コロスの力をゆめゆめ忘れたわけではあるまい。

また「お半長右衛門」の事件については、これから真相解明向かって動き出す。結果がせるまでしばらく待たれるがよかろう。

では、お絹さん、よろしく願いますぞ。

お絹 はい。(長右衛門の近くに寄って)あなた。

長右衛門 お絹、やり直しは……。

お絹 できません。さようなら。愛して……。

お絹と長吉が走り去る。  
黒の紗幕が降りる。照明が溶暗する。



金子 亨「それぞれの願い」200号  
第76回独立展

## 第四場 「道行二人の尼のモノローグ」

照明が溶明すると、上手舞台奥の桂川の早瀬にお半が立ち、手を合わせている。誰の目にも、今川に身を投げようとしたまま金縛りにあってフリーズした状態である。神の手が彼女の帯を押さえているのだろう。

紗幕が上がる。下手舞台前からお絹が急いで登場する。

お絹 お半さん。

お半 あ、お絹さん。お許してください。わたしは長右衛門さんを愛してしまいました。そして不義を犯しました。このままでは生きていかれません。だから死にます。本当に申し訳御座いません。どうかわがままをお許してください。

長吉 お嬢さん！

お半 長吉どん、あなたがどうしてここへ？ お帰りなさい。

長吉 お嬢さんに、一言お詫びを言いたかったんです。お嬢さん、嘘ついてごめんなさい。どうか帰ってきてください！

お半 長吉どん、いろいろご苦勞をかけました。怒っていません。さあ、皆さんのところへお帰りなさい。

長吉 お嬢さん、死なないでください。おれはお絹さんと一緒にお嬢さんのためになることならなんでもします。

遠くにたくさんの提灯の明かりが螢火のように動くの見える。

お絹 お半さん、死んではいけません。あなたは懐妊していると思っていますが、あなたのお腹の中にはややおりません。

お半 嘘です。ここややはにいます。

お絹 まあ、落ち着いて聞きなさい。あなたは長右衛門さんを深く、深く愛していたので一夜を共にした結果、子供ができると思ひ込んでしまいました。石部の宿での契り以来、あなたは妊娠の兆候が現れるのを待ち続けてきました。その結果、あなたの体があなたが願っている通りの反応を示すようになったのです。月のものがなくなる、強めの胸の張り、吐き気やおなかの張り、いらいらにしても、みんな心がもたらす症状なの。

お半さん、悲しいお話を打ち明けますけど、ちゃんと聞いてちょうだい。長右衛門さんは、女性にややを産ませる力のない男なのです。

お半 そんな馬鹿な。嘘です、嘘です。お半は長右衛門さん以外の人と恥ずかしい秘め事をしていません。だからこの子は長右衛門さんと……。

お絹 嘘を言っているのではありません。私と長右衛門さんの間にどうして子供がいなかったかわかりますか。結婚してもう五年になるのに、子宝に恵まれません。なぜだかわかりますか？

お半 嘘だ、嘘だ。言いくるめようとしている。あたしはもう引き返せません。だってここまで、桂川まで来てしまいました。今の私は死んだも同然です。

じゃ、長右衛門さんの口から聞きたい。お願いします。長右衛門さんをお呼びください。長吉、長右衛門さんをお呼びください。

お絹 (長吉に) 呼びに行つてはいけません。長右衛門殿は裁判が終わつたら必ず訪ねてきます。

お半 長右衛門さんはあたしが愛しているのを知っていますよ。お半に赤ちゃんができたことを誰よりもよく知っています。

お絹 お半さん、聞いてちょうだい！

お半 聞きたくない。あたしはこのややと死にます。

お絹 あなたは長右衛門さんのややが欲しい欲しいと思ひつめていたから、神様が、心と体が新しい命のひらめきを感じ取れるような夢の一時を授けてくれたのよ。でも本当は妊娠などしてないの。もう少したつたら、それが分かるようになるわ。

お半 神様ですって？ そんな神様、どこにいるんですか？

お絹 お半さん、岸野さんを知っていますか？ 一五年前、長右衛門さんと心中したお女郎さんです。岸野さんは桂川に入水し、仏様になりました。長右衛門さんは怖くなって逃げて帰り、岸野さんと結ばれていた赤い絹の糸をこっそり切つて、あたしと結婚しました。彼は新しい赤い絹糸を用意して、お絹と結び直したのです。

お半            そんな、残酷な！ 彼は人非人ではありません。

お絹            いいえ、彼はそういう人なんです。深刻にも、軽くもなれる人なんです。みんな彼を許してしまうんです。岸野さんが許しました。お絹も許してきました。そして今あなたも彼を許そうとしています。

お半            あたしは最初から長右衛門様を愛し、許しています。

お絹            石部の宿で、あなたを断ればいいものを、決断力のなさから、光源氏であるかのような夢によってあなたの求愛を受け入れてしまったのです。三十八歳の大人の大人が、十四歳のお嬢さんと枕を重ねてしまったのです。

お半            あたしは真剣でした。

お絹            真剣なら、何をやってもいいの。出張中の男の部屋へ、しかもれっきとした妻のいる男の部屋へ、丁稚の長吉に言い寄られて困っていると嘘をついて、お隣の旦那様の布団に潜り込んでもいいの。

お半            (突然大きな声で泣き出す)

お絹            泣いても解決にはならないわ。お半さん、あなたは妊娠していないのよ。妊娠しているとあなたが思い込んでいるだけ。私も何度も赤ちゃんができた夢を見たのよ。それから胸が固く張って、ついに白鷺がややを運んできてくれたのかしらとドキドキしたこともあったの。

お半            いえ、絶対ややがここにいます。ここで眠っています。

お絹            そうね、そう思い込んでいるあなたを無理矢理に説得しようと思いません。あなたの思い込みが醒めるまでそっと待ちましよう。わたしたちの思いは、夢のごとく、また波に漂う浮橋のごとく、はかないものです。お半さんとお絹は、浮舟かもしれません。薫の君は長右衛門殿かも。目を覚ましたら、教えて頂戴。(ト、お半の手をとる)

お半            はい。あれ、あれは何ですか？

お絹            あれは提灯の明かり。ほら、鉦太鼓の音が聞こえるでしょう。あなたと長右衛門さんを探しに町内の方々が走り回っているに違いないわ。

お半            長右衛門さんはどこにいるのですか？ お半を探しに来てくれないのですか？

お絹            お半さん、すっぱり思い切りなさい。わたしとあなたは長右衛門さんと結んだ赤い絹の糸をすっぱりと断ち切るのです。あの鉦は今生の別れを告げる先触れの楽の音。岸野さんが長右衛門様を黄泉の国へ連れ帰る歩みに合わせて叩く百と十。

お半            そんな！

お絹　　しっ！　長右衛門様はこれ以上の過ちを犯さないため、桂川の蛇籠の階段を暗い水底へ向かって道行していくのです。もう誰も止めてはいけないの。お別れです。

お絹とお半は浅く流れる瀬に座る。ステージの床一面が川の流れに変わり、小さい波がキラキラと輝き、流れる。二人手を合わせる。

お半　　長右衛門様！

お絹　　あなた、お別れです。桂川の水は冷たいでしょうね。お大事に。今度こそ成仏してください。お絹はお半さんを連れて仏門に入ります。

お半　　あたし、尼さんなんかになりたくない……。

お絹　　お半さん、あなたとわたしは残されたの。生きなさいと、残されたの。二人して生きなければならないのです。お半さんを救うのがお絹の務め。あたしは出家します。あなたが嫌がっても連れて行きます。

お半さん、よく聞いて。あたしもどれほど赤ちゃんが欲しかったことか。毎晩、毎晩、懐妊した夢を見ました。六角堂様に願をかけたのも二度、三度。お半さんの懐妊の兆候も、私の願いがあなたの夢に追い打ちをかけたのかもしれないわ。

あ、星が流れたわ。お父様、絹は仏門に入ります。年老いたお父様をお世話しないわがままをお許してください。お半さんを連れて行きます。信濃屋のお半さんのお父さま、お母さまに重々お詫びを申し上げます。

お父さま、季節の折々にはお父さまと信濃屋さんのご両親のお住まいを山の幸を携えて訪問します。

みんな離れ離れになってしまうのですね。輪がきちんとおさまって幸せなつながりを見せていても、一つの輪が抜けるとみんなバラバラに崩れ落ちてしまう。

いつか、どこかでみんなが再会して、新しい輪を作りましょう。

お半　　長右衛門様！

お絹　　お半さん、お立ちなさい。祈りながら、歩きましょう。さあ、愛しい人と結ばれている赤い絹糸を断つのです。

愛が深ければ深いほど、その愛を諦めなければならないことがあるのよ。真の愛は、愛を捨てなければならぬ時に生まれるのよ。さあ、赤い糸を断つために、祈りながら、歩みましょう

声明の音楽と水音が聞こえる。水が足元から引いて行く。お絹はお半の手をとって歩む。提灯を持った長吉が二人の足元を照らす。伊勢音頭が高まる。照明が溶暗する。

金子 亨「希望」200号  
第81回独立展



## 断章 尾上九郎右衛門さん

この作品は、今は亡き尾上九郎右衛門さんのお薦めで歌舞伎『桂川連理柵（かつらがわれんりのしがらみ）』を現代演劇に書き改め、演出した作品である。中村三千代氏のプロデュースで、池袋のシアターグリーンで上演された。読み返してにると、私が少しは成長したのか、人間観が変わったからなのか、手直ししたい部分があちこちに出てきた。今年になって、歌舞伎のテキストを参照しながら読み返してみると、この芝居はお半長右衛門の芝居ではなく、長右衛門の女房・お絹の芝居であるという解釈が沸き起こった。それから、旧テキストを少しずつお絹中心に書き改めた。

私も出演者も若く、オフ・オフ・ブロードウェイのラ・ママの小劇場で上演される脱近代劇、脱商業主義的な作品を作りたいと考えていた。当時、私は国立劇場に勤務して三、四年で伝統芸術に関しては素人同然であった。前の年にアメリカ国務省の奨学金をもらってアメリカに一年という短期留学をして帰ってきたばかりだった。したがってかなり生意気だったことは否めない。九郎右衛門さんは私の意見に耳を傾け、青年の論理の飛躍している部分をよく指摘してくださった。

ハーバード大学での歌舞伎演技の授業の話になると、いつも熱く語られたのを覚えている。大学生の発声はやはり未熟であり、同僚のアメリカ人インストラクターに頼んでも歌舞伎に使える声を作るのは難しいと断られてしまう。何かいい発声法がないかね、と尋ねられた。そこで私も学生たちに教えながら実験している発声法を九郎右衛門さんにお話しした。歌舞伎役者として、ハーバード大学のゲストアーティストとして、私のヴォーカル・トレーニングについて、いろいろなケースを想定しながら質された。私の教材は東大寺二月堂の修二会の「南無観自在菩薩」「南無観自在」「南無観」を反復する声明であった。

たまたま国立大劇場の舞台が空いており、九郎右衛門さんと私は舞台上で発声の組立て方を検討した。九郎右衛門さんは発声に使う息の通路（パイプ）の形と体の共鳴度をチェックし、私は声のフォーカスと子音の揺れをチェックした。一時間後には、九郎右衛門さんのお宅の居間にお邪魔し、ボカール・エクササイズの目的、内容、内容の基準、到達度、評価を議論し、簡単なマニュアルを書き上げた。

実に楽しかった。九郎右衛門さんの集中力に感嘆した。その後帰国なさるたびにハーバードでの授業実践を楽しそうに話してくださった。また大学でのポジション、研究費、さらには契約の大変さをもらすこともあった。当時の私は国立劇場の職員であり、週に一日、二科目だけ、ある大学で非常勤講師として教えていたに過ぎない。だから、アメリカの大学でのバト



ルの厳しさを実感できなかつたから、貴重な話を聞き流してしまった。今にして思えば、ハーバード大学やコロンビア大学でゲスト・アーティストとしてポジションをキープする大変さやグローバルなアカデミック環境を生きるスキルについて、もっと聞いておくべきだったと惜しまれてならない。

「お半と長右衛門」のご意見をお聞かせください。

小林志郎

メール・アドレス: DQJ10334@nifty.com

2015/5/18